
優しい魔王と光の姫君

鮮血ニ笑ウ死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい魔王と光の姫君

【Nコード】

N1994J

【作者名】

鮮血ニ笑ウ死神

【あらすじ】

魔王が住む島：シャイナ・ダルクに一人攻め込んできた勇者……

…じゃない〜!?

攻め込んで来たのは綺麗で可愛い女の子!

何で女の子がこんな所に居るの!?

魔王と少女が出会う時、運命の輪が動き出す。

物語りが始まる前に（前書き）

作者 「真に勝手ながら少し修正させていただきました本当に
いいですね！」

またこのような事があるかもしれません
がこれからもよろしくお願
いします！」

物語りが始まる前に

此処は魔界……

魔物と呼ばれる生き物以外存在しない暗黒世界……

ではなくて、魔族と呼ばれる人間が住み、植物も動物も存在している。

まあ、魔物が居ると言うのは本当だが、何も全てが悪い魔物と言う訳でもなく良い魔物もたくさん居る。

しかしこの魔界にも足を踏み入れてはいけない場所がいくつか存在し、その中でももっとも恐れられているのは、魔王の住む島：シャイナ・ダルクと呼ばれている島である。

このシャイナ・ダルクの周りには魔王の力により囲むように竜巻やら渦潮が発生しており、シャイナ・ダルクへの侵入は難しい物となっている。

そこまでして外界からの接触を拒んでいる島の主はと言うと……

「……………ぐう〜」

寝ていた……

「もう食えねえ……」

寝言言ってるし……

これが本当に皆に恐れられている魔王なのだろうか？

大口開けて涎よだれを垂らしている姿は何か間抜けまぬけである。

本当に大丈夫なのだろうか？（いろいろな意味で……）

さて、少し長くなつたが次からは魔王視点で話しを進めて行く。

我々は魔王の行く末を見守る事にしよう。

願わくば魔王が無事である事を……

物語りが始まる前に（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
次回もよろしくお願ひします。

プロローグ（前書き）

作者 「お待たせしました！

かなり疲れましたがやっと投稿できました

それでは読んで見てください！」

プロローグ

????「此処はどこだ？」

俺が目を覚ますとそこは闇の中だった。

右も左も上も下も全てが闇に覆おおわれている。

????「目がおかしくなりそうな所だな」

俺はしばらく辺りを見渡していると不意ふいに背後から気配を感じたので振り返って見た。

振り返って見ると辺り一面の闇が拡がっているだけで他には誰もいなかったが俺にはわかった、誰かが俺を見ていると俺の直感がそう告げていた。

????「誰だ！そこにいるのはわかってんだ、出て来い！」

俺がそうゆくと、物凄い勢いで誰かが俺の方へ近づいてきた、それと同時に今まで感じなかった恐怖きょうふ心が沸ふいて来て俺の身体から汗が吹き出した。

俺の本能が此処から逃げろと告げて来る。

俺は此処から逃げるため走ろうと思ったが足が動かなかった。

????「くそ！なんだってんだ……よ……？」

俺は自分の足を見て絶句くじした。

なぜなら黒い触手状の何かが足に纏わり付いていたからだ、しかも徐々に上へと登って来ていて地面？（闇）に引きずり込もうとしているのである。

「……なんだよこれ……なんだってんだよ！」

俺は必死に足掻いたが、身体はどんどん地面（闇）に引きずり込まれていった。俺は覚悟を決めて目を閉じた。
その時

「……あ……め……な」

声が聞こえて誰かが俺の手を掴んで助けしてくれた。

目を開けて見るとそこには、腰まで伸ばした癖のない長い黒髪に、まるで女神のような美しく綺麗な顔、さらに血のような真っ赤な瞳ひとまを持ち、その手に真っ黒な剣を握っている一人の女性が立っていた。こつちに向かって来ていたのはこの女性だったのなあ。

俺はその美しさに一瞬見とれてしまったが、直ぐに表情を引き締めて

「……あんたは一体何物なんだ？」

と、尋ねてみた。

「……お……は……だ……に……は……け……」

「……え？」

「……い……は……だ……い……」

「……ごめん、うまく聞こえないんだけど」

なぜだろう？

こんなに近くで喋っているのに彼女の声が聞こえないなんて。

すると彼女は目を閉じて何か呪文のようなものを唱え始めた。

「?????」を……き……聖……る……よ……者の……を……た……え」

すると俺の足元に白い魔法陣が展開され俺は光に包まれて…

夜中に目が覚めた。

身体は汗だくで、どうやら嫌な夢を見ていたらしい。

どうゆうわけか嫌な夢とゆうのは大抵覚えていたものなのだが全く思い出せない。

俺はいったいどんな夢を見ていたのだろうか？

まあとりあえずこの汗で濡れた下着をどうにかするか

そう思っただ俺はクローゼットの中からシャツとパンツを出して着替えて

「?????」ついでにトイレにでも行くかあ」

俺は部屋から出て、トイレに向かった。

トイレは一階に2つ、二階に1つ三階に1つあり俺の部屋は最上階にあるので三階に降りなければならない。ちなみにこの城は5層に別れていて後は地下がある。

俺は三階に降りて、右の廊下を進みつきあたりを左に進んだところにある男性用トイレと書いてある扉を開け、用をたした。

「?????」はあくまでまいどまいど思っけど此処まで来るのめんどくさいんだよなあ、今度最上階にもトイレをつけて貰えるようスティリア

にでも頼んで見るか」

そんな事を思いながら俺は自分の部屋に戻っていった。

部屋に戻った俺は、二度寝をしようとベットに潜り込んだわけなのだが

?????」……………眠れん」

すぐに眠むれるわけではなく、羊を千匹数えたりなどしてようやく眠れた。

そして日は昇りシャイナ・ダルクは朝を迎える。

?????」さてと、朝食はこんなもんかな」

シャイナ・ダルクの中央にそびえ建つ漆黒の城
魔王城の厨房で、三人の女性が朝食を作っていた。

?????」ステイリア、此処はもう私達二人で大丈夫だから、魔王様を起こしてきてもらえるかしら?」

ステイリア 「は〜い」
ステイリアと呼ばれた女の子は元気良く返事をし廊下へと駆けていった。

??? 「ねえシエリ - 姉さん」

シエリ - 「なに?、リリス」

リリス 「ステイリアで大丈夫かなあ〜」

シエリ - 「何が?」

リリス 「いやあ〜何か嫌な予感がしてさ〜」

シエリ - 「起こしに行つてきてもらっただけよ?心配しなくても何もおきないと思うけど?」

リリス 「なら良いんだけどさ〜」

シエリ - 「ほらほら、変な心配してないで朝食の準備をしましよ
あともう少しなんだから」

リリス 「うん…… (本当に何もおきなければ良いんだけど……)」

そして、ステイリアはとゆつと……

ステイリア 「魔王様〜いい加減に起きてくださいよぉ〜」

魔王を必死に起こそうとしていた。

ステイリア 「魔王様〜」

魔王 「うう〜もう食べねえ〜」

ステイリア 「もう食べねえじゃっないですよぉ〜！」

魔王 「……………ぐう〜」

ステイリア 「……………はあ〜仕方がないですよね」

ステイリアは、そう呟くと…

ステイリア 「邪悪を屠る聖なる焰よ…業火となりて焼き払え！」

呪文を詠唱して顕れた火球（直径二ミートル）を魔王が寝ているベツトめがけて投げつけた…

ボンッ！ドカーン！

と激しい音がした後

魔王 「うギャあああああ！?!?!?!?!」

とっ魔王の盛大な悲鳴が魔王城にとどろいた…

そしてその騒ぎを聞き付けて何人かの使用人や兵士が駆け付けた。

兵士A 「なつ何事ですか!？」

兵士B 「魔王様ご無事で!」

駆け付けた人の中にはシエリ・とリリスもいた…

シエリ・ 「ステイリア!これは一体何事です!」

リリス 「姉さん!今はそんなの後!それより魔王様は…」

そして皆の視線が魔王に集まる……

そこには…

魔王 「……………」

白目を剥いて倒れている魔王の姿があった。

一同 「……わあああ!魔王陛下!?!?!」

シエリ・ 「とつとりあえず、魔王様を医務室へ!」

いささか声が引きずってはいるが冷静に指示をだし、魔王を医務室に運ばせる。

それと同時に出て行くこうとするステイリアを二人の姉が引き留めた。

シエリ・&リリス

「どこに行く気ですか(だ)?ステイリア?」

ステイリア 「えっ！あつあのそのお〜え〜と」

シエリ - 「あなたには、じっくりと話しを聞かせてもらいます。
……じっくりと、ね」

ステイリア 「はい……」

シエリ - 「返事が聞こえませんか？」

ステイリア 「はいいいい！」

隣りでその光景を見ていたリリスは……

リリス 「（こっつ恐えええ…普段は優しい姉さんだけど怒るとめちやくちや恐いんだよな〜私はあまり怒らないであげよ〜と」

そんなことを思っていた。

そしてここは医務室。

魔王 「うっ此処は？」

リリス 「やっと起きられましたか？魔王様」

魔王 「ん？ああリリスか、つつかなんだよその喋り方は？」

リリス 「べつに、ただなんとなくだよ。
それより身体は大丈夫か？レイド」

レイド 「お前に名前を呼ばれるなんて随分と久し振りだな」

リリス 「二人つきりに馴れる機会がそれほど無かったからな、で、
身体は？」

レイド 「ああ、別に何ともないぞ」

リリス 「相変わらず頑丈な身体してるな」

レイド 「頑丈だけが取り柄だからな」

リリス 「いったいどの口が言うんだ？このチート魔王め」

レイド 「ん？この口だが？ところで、どうして俺は医務室で寝て
いるんだ？」

リリス 「覚えていないのか？」

レイド 「いきなり、凄まじい衝撃が身体を突き抜けたからなくい
まいち何が起こったか解らないんだよ」

リリスは、ステイリアがレイドを起こしに行った事、ステイリアが
魔法をレイドに向けて撃った事、それによって自分とシエリ・姉さ
んに叱られた事など全て話した。

レイド 「俺……よく生きてたな……てゆうか火傷やけど一つしてないなん
て俺の身体はいつたいたいどうなってんだ？」

リリス 「それはお前が魔王だからじゃないのか？」

レイド 「いや、意味が解らないんだけど？」

リリス 「最強ってことだ」

レイド 「最強ねえ〜ところでステイリアはどうしてる？」

叱られたんならやっぱり落ち込んでいると思うけど。

リリス 「ステイリアは今、部屋で反省してるよ、後で謝りに来ると思うからちゃんと聞いてあげてくれ」

レイド 「まあ別に怒ってる訳じゃないから聞かないなんて事はないんだけどさ〜とりあえず何か食わせられないか？もう腹が減って仕方がないんだ」

時計を見ると、12時を廻^{まわ}っていた。

リリス 「ああ、そういえばお前は気絶していたせいで朝食を食べそこねたんだっけ、待ってる今姉さんに頼んで朝食を作って来てもらうから」

そうゆうとリリスは医務室から出て行ってしまった。

レイド 「はあ〜このままずっとこの平和な日常が続いていけばいいんだけどなあ」

魔王は一人そう呟いた。

リリスは今、厨房に来ていた。

そこでは、昼食の片付けをしていたシエリ - がいた。

リリス 「シエリ - 姉さあ〜ん」

シエリ - 「ん？どうしたの？リリス」

リリス 「レ…魔王様が目を覚ましたんだけど…」

シエリ - 「本当！、それで魔王様の容態は！」

シエリ - はレイドが目覚めたと聞くとリリスに詰め寄った。

リリス 「おっ落ち着いて姉さん！魔王様は傷一つ無くてピンピンしてるから！」

シエリ - 「そっそう、よかったあ〜」

リリス 「姉さんは本当に魔王様の事になると我を忘れるんだからあ〜」

シエリ - 「魔王様は私達の主あつじなんですよ？心配するのは当然です」

リリス 「それだけじゃないような気もするけど……」

シエリ 「何か言いました？」

リリス 「いえ！何もいってません！」

シエリ 「そう？それならいいけどお、それより何か用があったんじゃない？」

リリス 「うん、魔王様がお腹を減らしてるから何か作って欲しいんだけど、お願い出来るかなあ？」

シエリ 「ううん、昼に兵士の皆さんが大量に食べちゃったから何も残っていないのよね、すぐに作れる物といたらサンドイッチぐらいかしら？、リリス悪いんだけど手伝ってもらえる？」

リリス 「OK、別にかまわないよ」

シエリ 「ありがとう、リリス」

二人はサンドイッチを作り始めた。

一方レイドはとゆうと……

レイド 「はあ、（ステイリアの気配が扉の向こうから感じるけどやっぱり怒ってるとでも思ってたのかなあ、そらあ確かに起こすために火球をぶつけるなんて少しやり過ぎだと思っけど、起きない俺が悪い訳だし、ステイリアが気に病む事なんてないと思っただけだな）」

リスが出ていってから数分後、扉の向こうにステイリアの気配を感じているがいつころうに入ってくる気配がない、それにしびれを切らしたレイドは……

レイド 「ステイリア？そこにいるんだろ？いい加減に出て来いよ」

ステイリアを呼んだ。

すると扉が開き、ステイリアが部屋に入ってきた。

ステイリア 「あつあの〜そのお、いつから気づいていらっしやったのですか？魔王様あ」

レイド 「最初からだけど？それより俺に用があるんだろ？聞いてあげるからいつてみ？」

俺はできるだけそう優しく言った。

ステイリア 「魔王様、朝は御無礼ごぶれいを働こいてすいませんでした！…
…ふいぐすつふええええ〜ん」

怒られると思ってびくびくしていたのだろう、謝った後にステイリアは、泣いてしまった。

レイド 「……………（優しく言ったのになんで泣くんだけ？俺ってそんなに恐いのか？、やべえ涙がでそうだ、…とりあえずステイリアを泣き止ませよう）」

そう思い、レイドはステイリアの頭を優しく撫でた。

レイドの手が頭に触れると一瞬びくつとステイリアは震ふるえたが目を

開けてこちらを見た。

ステイリア 「ま……ぐすつ……まおうさまあ？」

レイド 「ステイリア、俺は別に怒ってないよ」

ステイリア 「本当あ？」

レイド 「ああ本当だ、それよりも褒めてあげたいぐらいだよ」

ステイリア 「????？」

ステイリアは首をかしげた。

ステイリア 「……（なんでだろう？だって私、魔王様を魔法でぶっ飛ばしちゃったし褒められる所なんて何も無いと思うけど？）」

レイド 「リリースからさつき話を聞いてたんだけどさあ、ステイリア、お前あの時どのぐらいの大きさの火球を出したか覚えてるか？」

ステイリア 「ううと一様手加減したから2メートルぐらいだったかなあ？」

レイド 「……（それで手加減かよ？）」

ステイリア 「魔王様？」

レイド 「いや、なんでもないよ」

レイド 「で、褒める所つてゆうのはさあ、ステイリアはまだ10歳だよな？それなのにあんな大きな火球を作れるなんて凄いなって思った訳よ、しかもまだ本気じゃない、きつと一人で魔法の練習でもしてたんだろ？」

ステイリア 「うん……でも魔王様に向かって魔法を撃っちゃった事には変わりないし……」

レイド 「それは、起きない俺が悪いんだからステイリアが気にする必要は無いよ」

ステイリア 「でも……」

まだ何か思う所があるのだろう、ステイリアは何か言おうとしたがレイドがそれよりも早く言葉を紡いだ。

レイド 「じゃあさあ俺のお願い聞いてくれる？それで全て無しにするから、それならいいよね？」

ステイリア 「お願い？」

レイド 「そっお願い」

ステイリア 「……解った、でお願いってな〜に？」
ステイリアは少し考えたが了承した。

レイド 「実はさあトイレを新しく最上階に造ってほしいんだけどいいかなあ？」

ステイリア 「いいけどおそれだけ？」

レイド 「うんそれだけ、それで全て無しだからお願いね？」

ステイリア 「うん」

ステイリアは、元気良く返事をして廊下を駆けて行った。

レイド 「ふう〜元気になってくれてよかったなあ」

レイドが一人そう呟くと……

ステイリア 「魔王様あ〜」

ステイリアが戻って来た。

レイド 「ん？まだ何か用か？」

レイドがそう言うとステイリアは深呼吸をして……

ステイリア 「ありがとうございます！」

と言ってまた廊下を駆けて行った。

それは何についてのありがとうだったのだろうか？

その意味はきつとステイリアしか知らないだろう。

レイド 「うん」

シエリ・ 「何を考えていらっしやるのですか？魔王陛下」

レイド 「ん？シエリ・かなんでもないよ、ところでリリスは？」

シエリ・ 「リリスでしたら魔王守護騎士団まおうしゅごきしだんの訓練に行きました。サンドイッチを作りましたがよろしかったですか？」

レイド 「ああ、ありがとう」

シエリ・ から受け取った皿にはタマゴサンドとハムサンドが三つずつのっていた。

レイド 「ところで、その魔王守護騎士団ってゆうのは何とかかないのか？なんか恥ずかしいんだけど……」

シエリ・ 「それはアレン様に言ってください」

レイド 「はあ、あいつ……今何処どこでなにしてんだらうなあ」

シエリ・ 「さあ、ですがきつと元気でいらっしやいますと思いませんよ？」

レイド 「だな……さてと、俺は部屋にもどるとするよ、はいこれ、美味しかったよ」

俺はそうゆうと、食べ終わった皿をシエリーに渡した。

シエリ・ 「(いつのまに……)」

レイド 「シエリ・？」

シエリ・はレイドの食べる速度に唾然としていたが名前を呼ばれて慌てて返事をした。

シエリ・ 「いえ！何でもありません！」

レイド 「そうか？ならいいけど、じゃあなシエリ・」

レイドは部屋から出て行こうとしたがシエリ・に呼ばれて足を止めた。

シエリ 「あのおく魔王様？」

レイド 「ん？」

シエリ・ 「非常に言いにくいのですが今、魔王様の部屋はステイリアの魔法で燃えてしまって修理には2週間掛かるとの事です」

レイド 「まじで……？」

シエリ・ 「はい……」

レイドは少し考えて……

レイド 「たしかまだ空き部屋があったよね？」

と、言った。

シエリ・ 「はい、そちらの準備はしておりますので案内させていただきます」

レイド 「わるいな」

シエリ・ 「いえ、おきになさらずに」

シエリ・ は、そうゆうとレイドを部屋まで案内した。

シエリ・ 「こちらの部屋です」

レイドはシエリ・ に案内された部屋を覗くと、中は意外に綺麗で埃っぽさは感じられなかった。

レイド 「ありがとな、シエリ・」

シエリ・ 「いえ、このような部屋で申し訳ありませんがしばらくの間だけ此処をお使いください、では私はこれで」

そうゆうとシエリ・ は自分の持ち場に戻って行った。

レイドは改めて部屋を見回した。

部屋には、窓側にベットが一つとその横に机が一つ後はその逆側にクローゼットが一つあるだけの小さな部屋だったが

レイド 「なんだ、中々いい部屋じゃないか」

レイドは満足していた。

それから、特に何が起こるわけでもなく……………

.....
.....
.....
レイド 「さてと、今日はもう寝るか、また起きられなかったら悪いしな」

レイドは読んでいた本を綴じて眠りについた。
こうしてシャイナ・ダルクの一日が終わった.....

.....そして.....

???" 「あれがシャイナ・ダルク.....魔王が住む島.....」

声からするに女だろうか.....?、いやまだ女と呼ぶには幼い、少女と呼んだほうが正しいだろう

少女の手には直径15cmぐらいの丸い玉が載っていて、その玉にはシャイナ・ダルクが映し出されていた。

明日のシャイナ・ダルクは何が起こるのだろうか.....それは明日になってみなければ誰にもわからない.....
願わくば、魔王が無事であることを.....

プロローグ（後書き）

作者 「……………」

レイド 「作者はどうしたんだ？」

リリス 「それが、プロローグで力出し過ぎて、力尽きたらしいぞ」

レイド 「そういえば7ページも書いてたなこの作者…」

リリス 「なんでも次々に話しが浮かんで、気が付いたら7ページになってたらしい……」

レイド 「それで力尽きたと？」

リリス 「そうゆう事だ」

レイド 「はあ〜」

ところで、どうして俺達は後書きにでてるんだ？」

リリス 「それがどうやら私達にキャラクター紹介をしてほしいらしい」

レイド 「キャラクター紹介？」

リリス 「ああ、本編では全然私達の特徴が書かれていなかったからな、この場を借りて説明してくれとのことだ」

レイド 「なるほど……」

じゃあさっさと始めるかあ」

リリス 「最初はお前からだ、レイド」

レイド 「OK」

レイド……

フルネームは

レイド・ディア・グランディウス

魔王とゆう立場で人々に恐怖を与えているが、実際は優しく戦いよりも平和を望む。

戦闘能力は先代のなかでも最強で魔力も先代達を遥かに越えている。ちなみに八代目魔王である。

身体的特徴は

髪と目は黒色で、髪は耳が少しかくれていて襟足は首の付け根の部分までのびている。

顔はそこまで悪いとゆうわけでなく、中の上とゆうぐらいで、どちらかと言えばいいほうである。

年は18歳で

身長は174cm

体重は52kg

好きな物

読書・散歩・釣り・その他諸々で

嫌いな物、もしくは事は

戦い・家族や友達、仲間が傷付く事・自分の事しか考えていない奴など

レイド 「まあこんな所かな？」

リリス 「……………」

レイド 「ん？どうしたリリス？」

リリス 「いや、お前は本当に魔王とゆう立場が似合わないと思っ
てな」

レイド 「そうかあ？」

リリス 「そうだ、さて今度は私の説明でもするか」

リリス……

フルネームは

リリス・リア・クライアンツ

かつてリリス達が住んでいた村が盗賊に襲われてしまった時に7代
目魔王、つまりレイドの父親に助けられたが生き残ったのはシェリ
ー、リリス、ステイリアの三人だけだったのでレイドの父親が三人
を引き取って今に至る^{いた}。

身体的特徴は

髪は海のような青色で長さはレイドの髪を一回り長くしたような感
じだ

瞳は、髪よりも少し薄い青色になっていて、意思の強そうな目をし
ている。

顔はこちらも悪いとゆうわけでもなくどちらかと言えばいいほうだ
ろう。

年は18歳

身長は168cm

好きな物

シェリ・姉さんが作るお菓子

嫌いな物

レイドと同じ

リリス 「私もこんな所だな」

レイド 「おい、体重はどうした……」

リリス 「次はシェリ・姉さんの説明をしよう」

シェリ……

フルネームは

シェリ・リア・クライアンツ

村が盗賊に襲われた時にレイドの父親に助けられたが生き残ったのはシェリ・リリス、ステイリアの三人だけだったのでレイドの父親に引き取られ今に至る。

身体的特徴は

腰まで伸ばした金色の癖のある髪に綺麗な翡翠色の瞳が特徴。見るからに優しいそうで綺麗な顔をしている。

年は20歳

身長は169cm

好きな物

甘いお菓子と可愛い魔物

嫌いな物

虫・苦い物と辛い物

リリス 「シェリ・姉さんの説明はこんなもんかな」

レイド 「いや……だから体重は……」

リリス 「レイド、女性に体重の事は禁句だ」

レイド 「ふうくん、まあいいや、次はステイリアだな」

ステイリア……

フルネームは

ステイリア・リア・クライアンツ

村が盗賊に襲われた時、レイドの父親に助けられたが、本人はまだ小さかったので覚えていなく、物心もののこころがつく頃にはお城に住んでいた。身体的特徴は

夕焼けのような紅い髪を後ろに縛り、ポニーテールにしている。

瞳の色は紅に近いオレンジ色。

顔は姉に劣らずいいほつで可愛いとゆづ言葉が似合うだろう。

年は10歳

身長は138cm

好きな物

お姉ちゃん達と魔王様、あとシエリ・お姉ちゃんが作るお菓子とゆうことで

嫌いな物

特にないが、怒った時のシエリ・が怖いらしい。

リリス 「これでステイリアの説明も終わりだな」

レイド 「……………」

リリス 「ん？どうしたレイド？」

レイド 「いや、ステイリアは本当にいい子だなあ〜って思ってた
あ」

リリス 「確かにな、私も姉として嬉しく思うよ」

レイド 「ただ気になったんだけどさあ」

リリス 「なんだ？」

レイド 「シエリ……ってそんなに怒ると怖いのか？」

リリス 「ああ怖い……」

一度体験して見るか？」

レイド「いや、遠慮しとくよ……」

リリス 「けんめい賢明な判断だな」

レイド 「ところで、アレンの説明はどうするんだ？、本編で少しだけ名前がでたけど」

リリス 「アレンの説明は、アレンが本編で出た時に作者が後書きで説明するそうだ………多分」

レイド 「多分ってなんだよ？」

リリス 「また作者が力尽きるかもしれないとゆう事だ」

レイド 「なるほど、それでまた俺達が説明するかもしれないと？」

リリス 「そうゆう事だ」

レイド 「はあ、作者よ頑張ってくれ」

リリス 「じゃあ今日はこの返で終わりにするか？」

レイド 「そうだな」

レイド&リリス&作者

「「「それでは皆さんまた次回まで」

レイド&リリース

「「うわっ！作者いつのまたー!？」

ブシッ……………

出会い (前編) (前書き)

作者 「お待たせしてすいませんでした！話しが思い付かず気が付けば一週間も掛かってしまいました。が気力と根性で何とか書けました。

どうぞ読んでみてください。

出会い（前編）

此処は魔王の住む島：シャイナ・ダルク。（ドカアアアン）

…………… 今日もシャイナ・ダルクは静かな（ポオオン）朝を迎える。

レイド 「静かじゃねえええ！！さつきからしてるこの爆発音は一体なんだ!？」

すると兵士が一人レイドの部屋にやってきて……………

兵士 「魔王様！大変でございます、侵入者です!！」

と、報告した。

それを聞いたレイドは信じられないといった顔をしていたがすぐに表情を引き締め……………

レイド 「それで今どうなってる?！」

今の状況を聞いた。

兵士 「幸いにも皆、気絶させられているだけで、死傷者はいません、今魔王守護騎士団副隊長リス・リア・クライアンツ様が中庭にて侵入者を食い止めています。それがそれも時間の問題かと思われませ

レイド 「侵入者の数は?！」

兵士 「一人でございます!！」

俺はそれを聞いて驚いた。

城にいる兵士や騎士達は皆がそれなりの実力をもっている。その中でも騎士と呼ばれる者達は、ずば抜けて魔力が高く一人で魔王城に住む兵士20人分ぐらいの実力を持っているのである。その騎士達の副隊長を務めるリリスが苦戦をしいられる程の相手が現れれば、レイドが驚くのは無理はない。

レイドはしばらく驚愕の表情を浮かべていたが、すぐに^{へいせい}平静さを取り戻し

レイド 「気絶させられた者は今どうなっている？」

城の者達の心配をした。

レイド 「(もしこれで、気絶させられた者達がそのままの状態だった場合二人の戦いに巻き込まれる可能性がある)」

兵士 「それでしたら、使用人の方々がシェリ・使用人長の指示のもと無事保護し、城の地下に避難しています」

レイドはそれを聞いて安心した。

レイド 「そうか、よかったあ」

レイド 「俺はリリスの所に行くからお前も早く避難しろよ」

レイドはそう言って廊下を駆けて行った。

兵士 「魔王様！」

後ろで何やら兵士が叫んでいるが、もうレイドの耳には届いていなかった……

レイド 「(リリス無事でいてくれよな…)」

中庭では二人の女性が戦っていた。
一人は…

リリス 「くっ！このままではまずいな…」
やや押され気味なリリスと、もう一人は…

??? 「しぶといですね…」
流石は副隊長と言ったところでしょうか…」

顔はフードを被^{かぶ}っていて見えないが声からして女性…いや、少女と
ゆう事がわかる。

多分、兵士が言っていた侵入者とはこの少女の事だろう。

??? 「私の狙いは魔王ただ一人です！魔王の居場所さえ教えて
頂ければこれ以上危^{きがい}害を加えたりはしません！」

侵入者であろう少女はそう言うがリリスは教える気にはならなかつ
た。

リリス 「悪いが…それは出来ないな、あいつは私達にとって大切
な存在なんだ、だから何があっても守り通すと自分の魂^{たましい}に誓った、
だからあいつを裏切るような真似は、私は絶対にしない!!」

それを聞いた少女は少し残念そうに…

??? 「はあくそうですか、ならば仕方ありませんね、私の邪魔をされたくないので暫くの間眠ってもらいます」

少女は右手に持っている剣に魔力を込めてリリスに向かって走り出した。

リリス 「ただやられると思うなよ？何も剣術だけが全てじゃない」

リリスはそうゆうと、魔法の詠唱を行った。

リリス 「全てを凍てつかせる冷酷なる冷気よ……」

普通、魔法の詠唱は凄い集中力が必要なため動きを止めて立ち止まる事が殆どだ。

しかしリリスは少女の剣を受け流したりしながら詠唱をしていた。すると少女はリリスから距離を取った。

リリス 「槍と成りて敵を貫け！！」

リリスの手のひらから鋭く尖った無数の氷（長さ40cm）が少女に向かって襲い掛かった。
しかし……

??? 「確かに、剣術だけが全てではありませんね…」

少女が徐にそう呟くと自分が持っている剣をまるで盾を扱つかの用に前に構えた。

すると剣から複雑な魔法陣（直径1メートル）が浮かび上がり、そ

の魔法陣に当たった氷の槍を跳ね返した。

リリス 「なっ!?!?」

跳ね返された氷の槍はリリスのすぐそこまで迫っていた。

リリス 「くっ (ここまでか…)」

リリスが覚悟を決めたその時…

レイド 「まてんりゆう魔天流：攻めの陣一式…
まえいが魔影牙！」

リリスに迫っていた氷の槍が一瞬で黒い斬撃によって粉碎された。

レイド 「リリス!大丈夫か!」

リリスに迫っていた氷の槍を粉碎し、レイドはリリスの元に駆けて行った。

リリス 「レイド…
済まない助かった」

リリスはレイドに礼をゆうが剣を握っている手は震えていた。

リリス 「(護るべき主に護られるなど、私は騎士失格だ!)」

レイドはリリスの表情からそれを読み取ったのだらう、デコピンをリリスに食らわせた。

リリス 「つうくいきなり何をするんだ！、レイド！！」

余程痛かったのだろう、リリスは涙目に成りながらレイドに食ってかかったがレイドはそれを華麗にスルーして侵入者に言った。

レイド 「悪いけどこのまま帰ってくれないかな？俺戦うの嫌いだしそれに女の子を傷付けるわけにもいかないからさあ」

レイドがそう言うとりリスが……

リリス 「おい無視するな！てゆうよりお前は一体何を言ってるんだ！こいつはお前を倒そうとしてるんだぞ！それを……」

リリスはレイドに文句を言うが途中でレイドの言葉によって中断された。

レイド 「リリス、お前なくそう血の気が多いともてないぞ？」

リリス 「なっ！？お前とゆう奴は！どうなっただって私は知らないからな！もう勝手にしろ！！」

そう言うとりリスは何処かへ歩いて行った。

レイド 「おいリリス何処に行く気だよ」

リリス 「避難所だ！」

リリスの姿が見えなくなるとレイドは溜め息を吐いた。

レイド 「はあくリリスは一体何を怒ってるんだ？」

レイドはリリスが怒っている理由を考えていたが思いつかなかった
ので意識を目の前の少女に戻した。

レイド 「でっとうかなあ？」

???? 「えっ!？」

少女はレイドとリリスのやり取りにしばらく啞然としていたがレイ
ドに話し掛けられ、思考をレイドに戻した。

レイド 「いや「えっ!？」じゃなくて、このまま帰ってくれるか
って話しなんだけど」

少女は少し深呼吸をして……

???? 「無理ですね…」

私はあなたを倒す為ために此処まで来ました
あなたが生きている限り魔界まぎは平和を取り戻せない」

それを聞いたレイドは少し悲しそうな顔をして自分が持っている剣
を少女に向けた。

レイド 「そうかあ、じゃあ掛かって来いよ相手してやる」

少女も剣を構えて

???? 「行きますよ…」

今、二人の戦いが始まった…

この出会いが二人の運命を大きく変える事とも知らずに…

出会い（前編）（後書き）

レイド 「おい作者、何だこの中途半端な終わり方は」

作者 「それがあゝお前と侵入者とのバトルシーンがどうにも思い描けなくてさあ、だけどこれ以上時間を延ばせば読者の皆様に悪いしそれで……」

レイド 「なるほどな、それで一樣此処までを投稿したとゆう訳か」

作者 「そうゆう事」

レイド 「少しは反省しやがれ！魔天流：攻めの陣一式・魔影牙！」

作者 「うぎやああああああ」

レイド 「ふう〜作者が気を失ってしまったので今日は此処まで、それでは皆さんまた次回まで〜」

作者 「まてまてまてまてえええ！」

レイド 「うわっ！？びっくりしたあ」

作者 「はあはあはあ死ぬかと思った……」

レイド 「復活速いな」

作者 「うるさい！それよりも言っておくけど俺が死んだらもうこ

の物語りは終わっちまうんだからな、それを解っていて魔影牙ぶつ
けたんだろうな！」

レイド 「もちろん」

作者 「……ぶち殺す」

レイド 「悪い、冗談だ」

作者 「……………」

レイド 「そつそれよりもまだ何か用があるんだろ？速く言えよ）
凄い殺気だ、案外一番の最強キャラは作者だったりして…）」

作者 「何かむかつくけどまあいいや、実はな魔天流について今日
は説明したいと思うんだけどレイド頼めるか？」

レイド 「別に構わないぜ」

作者 「じゃあ頼んだ」

レイド 「おう」

魔天流……

初代魔王が編み出したと言われる剣技と魔法の融合技、その力は使
い手の器うつつわに比例し、使い手が未熟だと力は発揮はっぴきされない。

魔天流には攻めの陣と魔王マオウの陣と言うのが存在し、攻めの陣は基本
となる技、魔王の陣は奥義と考えてくれて構わないだろう。

二つとも一式から八式までの八つの技が在り、大体は一式、二式と
上がって行くにつれて技も強力な物になってゆく。

レイド 「ふう〜これで良いか？」

作者 「OK、ちなみにレイドが本編で使った魔影牙はテイルズの魔神剣の大きさを4倍にして黒くした様な感じなのでよろしく」

レイド 「テイルズってなんだ？」

作者 「こつちの世界のゲームの事だ」

レイド 「俺の技ってゲームから取ってんのか!？」

作者 「おう ゲームだけじゃないけどな」

レイド 「あっそうですか、頼むから変な技だけは付けなくてくれよ」

作者 「それは任せとけ、俺が格好いいと思った技しか付けられないから」

レイド 「じゃあ今度こそ終わりでいいか？」

作者 「あっ！ちょっとだけ待って！読者の皆様に言いたい事があるから」

レイド 「なんだよ？」

作者 「え〜と非常に言いにくい事何ですけど、次の投稿はまた遅くなると思いますので申し訳ありませんが読者の皆様にはまた少し待っていただきます、真まことに勝手ながら本当に申し訳ありません」

レイド 「一応理由を聞いてもいいか？」

作者 「話しが思いつかなくて、それで他の作者の作品を読んだりしたら何か思い付くんじゃないかと思ってさあ、もちろんパクル気はないけど、後は前話の修正もしたくて」

レイド 「成る程なあ、そう言う事らしいので読者の方々も許してやってくれ、ほら作者最後ぐらいバシツと決めるぞ」

作者 「そうだな」

作者&レイド

「それでは皆さんまた次回まで」

ブツッ……………

出会い (後編) (前書き)

作者 「皆さんお待たせしました！

やっと次話投稿です

これからはなるべく速く作成していくのでよろしくお願ひします！

出会い（後編）

???? 「はあああああ！！！」

中庭では、レイドが侵入者であろう少女と戦っていた。

レイド 「つつ！（なるほどリリスが苦戦するわけだ…剣速が速いし剣も重い、身体強化の補助魔法でも使っているのか？それに剣に光属性の魔力を纏わせることでさらに剣の威力も上げている、まあアレンのほうはまだまだ強いけどな）」

レイドは少女の剣を自分が持っている剣で防ぎ弾き返したが少女はすぐに体勢を整えてレイドに斬りかかった。

横からの一閃、下から斬り上げ、突きを繰り出し、振り下ろす。

少女の剣による連撃がレイドに幾度となく襲い掛かったがレイドはそれを全て防いだ。

???? 「どうしました？防戦一方じゃないですか、防いでばっかじゃ私は倒せませんよ？それともそれが貴方の実力ですか？」

少女は挑発染みたことをレイドに言うがレイドは特に気にした風でもなく

レイド 「さあどうだろうな？そう思うんだったら俺に傷の一つでも付けてみるんだな（……その場の乗りでつい剣を向けちまったけど女の子を傷付ける訳にはいかないしなあ）」

本心とは違う言葉で言い返すと少女は笑み（ほんの少し黒い）を浮かべ剣を持っている手とは反対の手に魔力を込め始めた。

「???」ではお言葉に甘え、少し本気で行きますね?」

少女はそう言くと魔法の詠唱おこなを行った。

「???」生命を照らす優しき光よ……」

少女が詠唱を始めると左手が淡く光を発した。

その光は徐々に強まっていき、それを見ていたレイドは頬を引き攣らした。

レイド 「ちょ!?!何その魔力量!?!少しでかすぎねえか?それに笑みが何か怖いんですけど!?!」

レイドは叫ぶが少女は華麗にスルーし、詠唱を完成させた。

「???」闇を撃ち抜く閃光と成れ!」

詠唱を完成させ、少女は深く息を吸って魔法名を叫んだ。

「???」放たれし閃光!!レイブラスト!!」

少女の手から太い光線の様な物がレイドに向かって放たれた。

レイド 「さすがにあれをちよくで受けるのは少しきついな……」

ドオオオオン!!!

レイドの眩きは少女が放った魔法による爆発音に掻き消された。

「……?」

少女は魔王の呆気ない最後に拍子抜けしていたがすぐに倒したと言
う考えを打ち消した。

レイド 「げげげ、ふう〜あぶねえ」

案の定やはり魔王は生きていた。

「???」 「どうやって防いだんですか?確かに直撃したと思っ
たんですけど?」

身体には傷一つないレイドの姿がそこにあつた。

少女が疑問に思うのは当然の事だが自分の手の内を敵に教える者は
余程の馬鹿じゃない限り早々(そうそう)いない……

レイド 「ん?闇の力で吸収しただけだけ?」

筈なのだがこの魔王は少し特別のようだ……
もしくはただの馬鹿か……

レイド 「……(何だろう?何か物凄く不愉快な気持ちになっ
てきた)」

一方少女はレイドの返答が信じられないといった表情でレイドを見
ていた。

その視線に気づいたレイドは少女の方を向いて言った。

レイド 「別に驚く事でもないだろう?闇の特性は吸収、こんな事
は誰でも知ってる」

そう、レイドが言うように闇、それと光には特別は性質がある。闇の魔法は吸収と言って有りとあらゆる物を飲み込む事ができ、それによってレイドは少女が先程放った魔法を吸収したのである。逆に光には反射と言って有りとあらゆる物をそっくりそのまま跳ね返す事ができる。

リリスとの戦いで使ったのがこの光の反射の力だ。

この闇と光の性質は意味は違うが同等の力を持っているため闇と光の力がぶつかった場合は魔力の多さ、純粋じゆんすいな力勝負になる。

??? 「私が全力とまではいかなくともそれなりの魔力は込めて放った魔法をあなたは吸収したと？そんな事あるわけ……」

レイド 「あるわけない…」

どうしてそう思う？」

??? 「え？」

少女が喋り終わる前にレイドは口を開いた。

レイド 「自分に自信を付ける事は良い事だし過小評価しろなんて言う事も言うつもりはない、けどな？自分を過信しすぎるのは良くない、そんな事だといつか足元すくを掬すくわれるぞ？」

レイドのその言葉は少女の感に触ったのか少女は大きな声で叫んだ。

??? 「そんな事大きなお世話です！」

レイド 「はあ、一応忠告はしたからな」

レイドは少女の言葉にやれやれと言った風に溜め息を付いて剣を構えた。

レイド 「魔天流：攻めの陣一式・魔影牙!！」

レイドが剣を振り下ろすと共に黒い斬撃が少女に向かって放たれた。少女は剣に光属性の魔力を込め前に構えた。少女の剣から複雑な魔法陣が浮かび上がり、レイドの魔影牙を跳ね返した。

???? 「はあああああ!！」

レイドの魔影牙を跳ね返すと少女はレイドに向かって走り出し、剣を振り下ろす。

レイドは跳ね返った魔影牙を剣で薙ぎ払い、少女の剣をサイドステップで躲し距離を取る

???? 「光よ…」

弾丸と成りて撃ち抜け!

光の球弾!! レイブレット!」

少女は素早く詠唱を完成させ、現れた光り輝く球体（直径30cm）x8をレイドに投げつけた。

レイド 「ちっ!」

地面から闇が溢れ出し、まるで主人を護るかの如く螺旋を描きレイドに纏わり付いた。

レイドに向かって放たれた光弾はレイドに纏わり付く闇によって吸収された。

「それで先私^{オク}が放ったレイブラストを吸収したと言う訳ですか？」

レイド 「まあそう言う事、後一応言っておくけどお前の光じゃ俺の闇は消せないよ」

「そんな事やって見なければ解りませんか？」

レイドの言葉を挑発と受け取ったのか少女の声にはほんの少しだが険が宿っていた。

レイド 「ならばお前の本気を見せてみる」

レイドは少女の本気の手を見てみたいが為に態^{わざ}と挑発染みた事を言ったのだが少女はそれに気づく訳でもなく挑発だと解っているも本気を出さないで勝てる相手でもないと言う事も解っている。少女はレイドの言葉に乗った。

「魔界に宿りし光のかけらよ……」

少女が詠唱を始めると、大地から海から周りにある草や木に岩に至る所から光輝く粉の様な物が出て来て少女の身体に吸収されて行った。

「我に力を与えたまえ……」

少女の身体は光を発して、光の粉を吸収する度にその光は徐々に強まって行った。

「全てを薙ぎ倒す光と成りて……」

少女が左手をレイドに向けると少女が吸収した光が左手に集まり光り輝く球体が現れた。

球体は光が集まる事に大きくなり、レイドの方面からでは少女の姿が完全に見えなくなる程巨大化していた。
その大きさ直径約二メートル。

??? 「闇を掻き消せ！」

少女の詠唱が完成すると光の球体はより一層輝いた。
少女は息を吸って魔法名を叫んだ。

??? 「限界を越えし光!! オーバレイ!!」

球体から少女が先程放ったレイブラストの何十倍もの大きさの光が砲撃となってレイドに放たれた。

レイド 「はあゝ、使っしかないかな」

レイドはそう呟き空いている左手を横に伸ばした。

レイド 「こい、魔刀!! デグロニクル」

レイドが静かに呼ぶと左手が闇に覆われレイドが左手を振ると漆黒の刀が姿を現した。

少女の放った魔法はもうすぐそこまで来ていた。

レイド 「斬る……」

レイドは静かにそう言って刀を横一閃に薙ぎ払った。

すると空間に一本の線が現れた。
線は段々と丸みを帯びていき、それまで何も無かった空間に一つの大きな穴がレイドの前に出現した。
少女の放った魔法は、その穴の中を真っ直ぐと進んでいき、やがて全てが穴の中へと消えると穴は閉じていった。
少女はその光景をただ愕然とみていた。

??? 「(そんな……あれは私が覚えている魔法の中で一番威力が高い最強の魔法だったはず……それを……)はっ!？」

そこまで考えて少女はレイドから発せられている魔力量に気が付いた。

レイドは魔法など使っていない。
ただ身体に抑え切れないほどの魔力がレイドから無意識に垂れ流されているのである。

??? 「ひっ!」

少女は思わず悲鳴を上げた。

レイドの魔力に怯えたのではない……

少女は見てしまったのだまるで血の様に赤く変色したレイドの瞳を……

その瞳を見た瞬間、悪寒が背筋を走り今すぐにも逃げ出したい衝動に駆られた。

しかし恐怖の余り足が竦すくんでしまってその場から逃げ出す事さえ出来ないでいるとレイドがこちらへ歩み寄ってきた。

??? 「(やられる!!)」

少女は本能的に死を覚悟し目を閉じた。

そして少女との距離が手を伸ばせば触れる程近くまで来た所でレイドは足を止めた。

??? 「いやだ！まだ、まだ死にたくない！お願い！神様でも何でもいいから私を助けて！」

そしてレイドから手を伸ばされ……

??? 「……………え？」

少女の頭を撫でた。

撫でられた本人は何が起こったのか理解出来ないと言った風にレイドを見ていた。

レイド 「あゝ悪い、怖がらせる積もりは無かったんだけどさあ、ああでもないしなと此処ら一带吹っ飛んでたから魔刀を使わせてもらったわ、まじでごめん」

そう言っつてレイドは少女の目を見て謝った。

レイドの瞳は元の黒色に戻っていていつの間にか少女からは恐怖心が消えていた。

少女は地面に座り込み力無くレイドを見た。

レイド 「おっおい！大丈夫か？」

??? 「平気です…（ああそうだ、彼は魔王なんだ、例えどれだけ強くても、どれだけ力が在ろうとこの魔界には彼を倒せる者など存在しない

最強にして最恐ゴキウキョウの存在、故に魔王
魔界の王にして私達魔族の上に立つ者」

静かにレイドに返事を返し、少女は改めて魔王とはどう言う存在か
思い知ったのだった。

レイド 「そうか？なら良かった」

レイドはそう言って少女に微笑んだ。

その笑みを見た少女の中である疑問が生まれた。

??? 「（一体どれが本当の彼なのだろう？助言染みた事を敵で
ある私に言ったり、今みたいに優しい笑みを浮かべて見たり、全く
恐怖を感じさせない存在が本当の彼？それとも……）」

レイド 「それじゃあ俺と一緒にちよつと城の中まで来てもらえる
か？いろいろと聞きたい事があるから」

そう言ってレイドは少女に左手を差し出した。

少女はレイドに喋り掛けられて考えるのを一度止め、レイドの手を
借り立ち上がった。

レイド 「そう言えば未だ名前を言って無かったな、俺はレイド

レイド・ディア・グランディウスだ、お前は？」

レイドが名乗り少女の名を聞くと少女はフードを取り素顔を晒した。

ファイア 「ファイアです

ファイア・レイ・クリステイナと言います」

少女がフードを取ると金色の長い艶のある髪に青空の様な澄み切った瞳が特徴的で美少女と言う言葉がぴったりな程綺麗な顔が姿を現した。

レイド 「(こんな顔してたんだな)」

レイドが少女に見取れているとファイアが訝しげにレイドに言った。

ファイア 「私の顔に何かついていませんか？」

ファイアのその言葉にレイドはファイアの顔を凝視していた事に気付いて慌ててファイアから離れた。

レイド 「わっ悪い！そのく余りにも綺麗な顔だったからさ見取れてたは」

ファイア 「//////////」

レイドのストレートな言葉でファイアの顔は一瞬で紅く染まった。

レイド 「じゃあクリステイナだっけ？城の中に入るうか？」

ファイア 「//////////ファイアで構いません」

まだ紅い顔でファイアがそう言うとレイドは笑みを浮かべ言い直した。

レイド 「じゃあファイア行くか？」

レイドがそう言うとファイアは一言

ファイア 「はい」

と言って二人は歩き出した。

さらなる波乱の幕が上がる事とも知らずに……

出会い (後編) (後書き)

作者 「作者と」

レイド 「レイドの〜 (棒読み)」

作者&レイド

「いろいろ説明コーナー (レイド棒読み)」

作者 「おいレイドもう少し気持ち込めろよ」

レイド 「なんで俺がこんな事言わなきゃならないんだ…」

作者 「だって俺だけだと寂しいじゃん」

レイド 「他の奴とやればいいだろ？」

作者 「やるつもりだけど、最初は主人公からと相場が決まってるだろっ?」

レイド 「誰が決めたんだ？」

作者 「さあな、誰だろうな？」

レイド 「おい……」

作者 「それじゃあ説明始めるか」

レイド 「今日は何を説明するんだ？」

作者 「まずはキャラ紹介からだな」

レイド 「キャラ紹介ってあいつか？」

作者 「ああ、あいつだ」

レイド 「そうか、じゃあ説明始めるか」

作者 「ああちよつとまって本人を呼んでるから自分の紹介ぐらいやらせてやるっぜ」

レイド 「は？」

作者 「おゝいもう出て来ていいぞ」

???? 「……を薙ぎ……光……」

作者 「???おゝい」

???? 「闇を掻き消せ！」

作者 「ちよ!?!」

???? 「限界を超えし光!!オーバーレイ!!」

作者 「つぎゃあああああ!?!?!?!」

レイド 「……………」

???? 「もう酷いじゃないですか!私一応メインヒロインですよ

！それなのにいつまで名前を、？にしてるんですか！」

レイド 「あゝ、ファイア？」

ファイア 「何ですか！」

レイド 「と、とりあえず落ち着け、な？」

ファイア 「ううゝわかりました」

レイド 「ふうゝさてと、おゝい作者？大丈夫か？」

黒い塊（作者）

「……………」

返事がない……

ただの屍のようだ……

レイド 「……………やばくね？ファイア！俺はちよつと作者を連れて魔王城に戻るから後は頼んだ！」

ファイア 「え！ちよゝ、ちよつとレイドさん！」

レイド 「ほら作者しっかりしろ！」

ファイア 「行っちゃった……後は頼んだって一体何をすれば……
とりあえず自己紹介でもしますか」

ファイア

フルネームは

ファイア・レイ・クリステイナ

魔王城に一人で攻め入り、魔王守護騎士団副隊長のリリスが苦戦を
しいられるほどの腕前を持っている。

身体的特徴は

腰まで伸びた癖のない艶のある金色の髪に、青空をそのまま切り取
ったような蒼穹ソラノの瞳、まだ幼さが残る美少女と言っても不思議じゃ
ない綺麗な顔が特徴的

年は16

身長は164cm

好きな物

甘い物

嫌いな物

虫 特に黒くて触覚がある奴

ファイア 「こんなところでしょうか？」

レイド 「ふう〜ただいまっ」と

ファイア 「あっレイドさんお帰りなさい、作者さんは？」

レイド 「作者は魔王城にある医務室でシェリーに見てもらってる

よ
「よ」

ファイア 「そうですか……」

レイド 「ファイアはもう少し手加減しような？」

ファイア 「はい……」

レイド 「さてとファイア、自己紹介はすんだのか？」

ファイア 「はい、しかし次に一体何を説明すれば良いのか……」

レイド 「あゝそれは大丈夫だ、運んでいる途中で作者が気が付いてな魔王城に着いて今日説明する事をメモしてもらった」

ファイア 「そうなんですか（凄い回復力……私のオーバーレイをうけて短時間で意識を戻すなんて、作者さんは一体何者……）」

レイド 「それじゃあ魔刀の説明でもするかな」

ファイア 「魔刀ってあの黒い刀の事ですか？」

レイド 「そつ、て言っても詳しい説明は本編でするから形だけだけどな」

ファイア 「そうですか、では説明をお願いします」

レイド 「えゝとなになにに、魔刀の形は基本的に、ブリーチ っつて言うアニメの主人公が使ってる、天鎖斬月 っつて言う刀にそっくりらしいな」

ファイア 「アニメってなんですか？」

レイド 「さあな、作者にでも聞いてくれ」

ファイア 「わかりました、次は何の説明ですか？」

レイド 「次は説明って言うより質問が来たからその返答だな」

ファイア 「質問って誰からですか？」

レイド 「作者の友達からだ」

ファイア 「へえ、それで何て？」

レイド 「え、となになに、ステイリアはまだ10歳だよな？それなのに何でトイレなんていう物を作らせようとしてんだ？、って質問についてだな」

ファイア 「それで作者さんは何て？」

レイド 「本編で説明するからまで、だと、って言う事で作者の友達よ、なるべく速く書くように作者に言っておくからもう少しだけ待っていてくれ」

ファイア 「本当に少しなら良いんですけどね」

レイド 「大丈夫だろ……多分」

ファイア 「最後の言葉が気になりますけど他に説明する事はありま

すか？」

レイド 「いや、特に何も無いな」

ファイア 「それじゃあ終わりにしまそうか？」

レイド 「そうだな、作者がいないけどまあ仕方が無いだろう」

レイド&ファイア

「それでは皆さんまた次回まで」

ブツッ……………

新しい仲間？（前書き）

作者 「お待たせしました
それではどうぞ」

新しい仲間？

魔王城の門をくぐり、中に入ると広い空間となっていて、両端には階段が備わっている。

周りには絵画やら魔物の像などが存在し、前に進んで行くとすぐに扉が現れる。

扉を開くとダンスホールとなっていてドーム状の広い空間となっている。

ダンスホールにも真っ直ぐ進んで行くと扉が存在しそこを開くと中庭へと繋がっている。

中庭に出ると中央部分に噴水が見え、周りには花壇が設置され、色とりどりの花が咲いている。

そのまま先へと進むと魔王城の本城と呼ばれる部分に到着し、扉を開けると王座の間と言う部屋に出る。

王座には魔王が座っているはずなのだが……

レイド 「何故、俺がこんな目に……」

今はロープでぐるぐる巻きにされ床に座らされている。

ファイア 「貴方は、確か魔王でしたよね……？」

ファイアが白い目で見ながらレイドに聞くとレイドも訳が解らないと言った風に唸って見せた。

レイド 「うーん、一応魔王何だけどねえ」

レイドはそう言っただけで自分達を縛った本人達を見た。

レイド 「え〜と、何で俺達は縛られているのでしょうか？（何故か敬語）」

レイドがそう言っただけでシェリーとリリスが前に出て来た。

リリス 「まず、侵入者をそのままにしておく訳には行きませんが、何を仕出かすか解らないので持ち物を奪い、拘束させていただきます」

レイド 「（リリスまで何故に敬語？……て、ああ皆の前だからか）」

レイドはリリスの言葉遣いが気になったがすぐにその理由も解ったので考えるのを止めた。

シェリー 「次に魔王様を縛った理由ですけど……」

リリスの次にシェリーが喋りだし、一度言葉を区切り明らかに怒った様な目でレイドを見詰めた。

レイド 「（あれ？明らかにシェリーは怒ってるよな？俺何かしたっけ？）」

シェリー 「それは魔王様が一番ご存知かと？」

シェリーがそう言っただけでレイドを見ている者達の目が険しくなった。

レイド 「（シェリーだけじゃない？もしかして皆怒ってる？）」

レイドは皆が怒っている理由を考えてみるが全く心当たりが無く、シエリーはレイドの表情からそれを読み取ったのか溜め息をつき、非難がましくレイドを見つめ言葉を発した。

シエリー 「はあ、本当に解りませんか？」

レイド 「え〜と（何だろう？シエリーが少し怖い…、俺本当に何をした？）」

レイドが本当に解らなそうにしているのを見て、ついにシエリーがキレた……

シエリー 「魔刀と、魔眼、をお使いになられましたでしょう！それを私達は怒っているのです！」

シエリーの怒声が王座の間に響き渡り、それを聞いた者達は皆、驚いた様にシエリーを見た。

レイド 「（成る程なあ、それで皆は怒ってたのか、それにしてもあのシエリーが怒るなんて少し驚いたな、よく見れば皆も驚いてるし、あ、リリスはそれ程驚いていないな、やっぱりシエリーでも怒る時は怒るって事か）」

シエリーの怒声に驚き、皆が怒っている理由をようやく理解したレイドはそこで一人見当たらない事に気が付いた。

レイド 「（そう言えばステイリアの姿が見えないなあ何処どこにいるんだ？）」

そう思い、レイドは辺りを見渡した。

レイドが魔刀と魔眼を使った理由を話すとシェリーは俯き、拳を握り締めていた。
そして……

シェリー 「それだけのために貴方は自分の命を縮めたのですか！」

シェリーは顔を上げレイドに叫んだ。

シェリーの瞳は潤み、その瞳には涙が溜まっていた。

ファイア 「(皆、私の存在を忘れてませんか？まあこんな状況では私の出る幕は無いですけどね…

それにしても先から聞く魔刀とか魔眼とか命を縮めるって言うのは一体どう言う意味なんでしょう？)」「」

ファイアが考え事をしている中レイドはシェリーの叫びを聞いていた。

シェリー 「庭が吹っ飛ぶ？私達に悪い？それが…、それが一体何だっって言つんですか！！」

レイド 「……………」

シェリー 「そんな物よりも貴方の方が大切に決まっているじゃないですか！庭は直せます！花も種を植えればまた咲きます！ですが貴方は一人だけなんです！私達と思い出を創った貴方は！私達の大切な貴方は！この世に！この世界に！たった一人しかいないんです！だから！、だから！お願いですから御自分で命を縮める様な真似はなさらないで下さい！」

それはシェリーの心の叫びだった…

大切な人をもう二度と失いたくないと言う心の叫び…

レイド 「じめん…」

レイドは短く、だけど精一杯の思い込めて此処にいる者全てに謝った。

レイド 「（そうだよな…、自分の家族を失うってやっぱりつらいよな）」

レイドの思いが皆に通じたのか皆の表情が和らぎシエリーは瞳に溜まった涙を拭った。

シエリー 「もう二度とその様な真似はなさらないと誓ってくれますか？」

レイド 「誓うよ、俺はお前らを悲しませる様な真似は二度としない」

レイドはシエリーの問いに答えを返し、静かに笑みを浮かべた。

シエリーはその答えに満足したのかレイドの身を縛っているロープを解いた。

レイド 「ところでなんで俺は縛られたんだ？別に縛んなくても話しは聞くんだけど？」

レイドが自分の疑問をシエリーにぶつけるとシエリーは苦笑を浮かべ答えた。

シエリー 「私もやり過ぎだと思ったんですけど、リリスが、あの馬鹿は一体何をしてるんだ！侵入者諸共縛り上げて牢屋にぶち込ん

でやる！　と云って兵士の人達を連れていってしまったので止める間がありませんでした」

レイド 「成る程な……」

レイドはそう呟き、半眼でリリスを睨んだ。

リリス 「な、なんだその目は！　言っておくが私は当たり前的事をただけだからな！」

レイド 「……………（仮にも王を縛っておいて何が当たり前なんだ？）」

シエリー 「リリス、何ですか？　魔王様に向かってその口の聞き方は？」

リリス 「申し訳ありませんでした……………」

リリスの言葉にレイドは心でツツコミを入れ、シエリーがリリスの言動を諫めるとリリスはレイドに頭を下げた。

レイド 「べつにいいよ、さてと疲れたから部屋に戻るとするか、皆も持ち場に戻るなり何なりしていいから、じゃっそう言う事で解散っ」

レイドの呼び掛けで皆が王座の間から出て行こうとした時……

ファイア 「ちよっ！　ちよっ！　私の存在を忘れてませんか！？」

一同 「……………あ……………」

ファイアの叫びによって皆の足が止まった。

ファイア 「まさか…、本当に私の存在を忘れていたんですか……？」

ファイアは信じられないと言った風に瞳を大きく見開きレイド達を見た。

レイド 「え」と、ごめん…」

ファイア 「ふん…」

取り敢えず謝る事しか思い付か無かったのでレイドはファイアに謝ったがファイアはそっぽを向いてしまった。

ファイア 「（自分の命を狙って来た侵入者を忘れるなんてどうかしてます！）」

レイド以外の一同

「（うわ、いじける侵入者に謝る魔王、なんてシュールな光景だろっ……）」

皆がいろいろと思っている中、レイドはどうしたものかと考えて見たが何と言ってもいいか解らなかったので……

レイド 「と、取り敢えず別の部屋に行こうか？」

場の空気を変えようと別の部屋に行く事を提案した。

ファイア 「解りました……」

ファイアもそれを了承してくれたのでレイドはファイアを縛っているロ
ープに手を掛けた。

ファイアを含む一同

「……はあ?」「」「」

レイドの行動に、そこにいるレイド以外の者達が、こいつ一体何し
てる?、と言った風にレイドを見た。

レイド 「ん?どうした?」

その視線に気付いたレイドは首を傾げた。

リリス 「どうしたもこうしたもおま…魔王様は一体何をしている
のですか?」

レイド 「何って、このままじゃ窮屈きゆうくつそうだからロープを外はずそうと
してるんだけど?」

リリスがレイドの行動について問うとレイドはまるで当たり前と言
う様に答えた。

ファイア 「あの〜私から言つのも変な話しかと思っんですけどそん
な事をして良いんですか?」

ファイアも少し思う所があるのか口を開いた。

レイド 「何が?」

ファイア 「何がって…、ロープを外すのがですよ
私は貴方の命を狙った侵入者ですよ？それなのに自由にするなんて
…」

レイド以外の全ての者がファイアの言葉に思わず頷いた。
その言葉にレイドは笑みを浮かべた。

レイド 「だって持ち物は全て奪われたんだろ？武器も持っていない
女の子にやられる程俺は弱くないよ、それにもし逃げたとしてもま
た捕まるのが落ちだろうし」

レイドはそう言ってファイアを縛っているロープを解いた。
ファイアは何とも言えない顔をして立ち上がった。

レイド 「それじゃあ行こうか？シェリーとリリースも一応来てくれ、
それ以外の者達は悪いんだけど持ち場に戻っていてくれないか？後
で報告するから」

一同 「……はっ！」「……」

兵士達の返事を聞くとレイド達は右側に在る扉を開け部屋を出て行
った。

兵士A 「はあく、俺達はまだまだ弱いな……」

レイド達が出て行くと兵士の一人がそう呟いた。

兵士の呟きを聞いた隣の兵士が自分に言い聞かせる様に言った。

兵士B 「そうだな…、だからこそ俺達はもつと強くならなくちゃ
いけないんだ、あのお優しい王を守る為に……」

それを聞いた兵士は静かに頷いた。

兵士A 「だな…、それにしても、俺はお前達を悲しませる様な真似は二度としない、か」

兵士B 「ん？いきなりどうした？」

兵士が先程レイドが言ったその言葉を口にするのと隣にいる兵士が不思議そうにこちらを向いて言った。

兵士A 「いや…、ただな？魔刀と魔眼を使わないとは言って下されないんだなと思ってな？」

兵士がそう言うのと隣にいる兵士はレイド達が出て行った扉の方を向いて言った。

兵士B 「あの人は絶対にそんな事は言わないさ」

兵士A 「何故？」

兵士が尋ねるともう一人の兵士が言った。

兵士C 「あの人は守れない約束は絶対にしない
魔刀も魔眼も俺達を守るには必要な力だからな」

兵士A 「俺達を守る為…か、あの人には俺達の為何かじゃなく自分の為に力を使って欲しいな」

兵士がそう言うと誰かが手を叩く音がした。

パンパン！

使用人（女） 「物思いに耽^{ふけ}るのはそのへんにして自分の持ち場に
戻りましょ？兵士や騎士の人達にもいろいろと片付けを手伝っても
らいたいのでついて来て下さい」

使用人の女性がそう言うつと兵士達は思考を切り換えて部屋から出て
行った。

一方レイド達は…

レイド 「え」と、じゃあまずは身元の確認をしたいんだけどファイ
アは何者で何処から来たのか教えて貰えるか？」

此処は応接室だろうか？

テーブルを挟んで、二人はソファーに座り紅茶を飲んでいた。

シェリーとリリスはレイドが座っているソファーの後ろに立ち、レ
イドがファイアの名を呼ぶとシェリーがその言葉に反応した。

シェリー 「いつの間に名前を呼ぶ程仲が良くなったんですか？」

レイド 「仲が良いと言うか、ファイアが名前で呼んでくれて言うつ
からそう呼んでるだけだけど？」

レイドがそつ言つと…

シエリー 「そうですか…」

シエリーは不機嫌そうにフィアを見つめた…、て言うよりも睨んだの方が正しいだろう。

フィア 「何だろ？シエリーて呼ばれてる女の人何か怖い……」

フィアはシエリーからただならぬ気配を感じたが取り敢えずレイドの質問に答える事にした。

フィア 「え〜と、そちらのお二人にはまだ名乗っていませんでしたよね？、私の名はフィア・レイ・クリステイナと言います」

フィアが名乗ると二人は驚いた様に瞳を大きく見開いた。

シエリー&リリス

「なっ!?!」

レイド 「どうした？二人共？」

レイドは二人の反応を訝しげに思い聞いてみた。

リリス 「どうしたも何も、この前の報告書に書いてあっただろう！フィア・レイ・クリステイナ、クリステイナ王国の第一王女だ！」

レイド 「………まじで？」

レイドは信じられないと言った風にリリースを見た。

それもそうだろう、人々が恐れる魔王が住む島に一人で来る姫様が何処にいる？

まあ本当だとしたら此処にいる訳なのだが…

レイドがしばらく考えているとシェリーが言葉を発した。

シェリー 「しかもそのクリステイナ王国ですけど、王女がいなくなったとかで大変な事になっているらしいですよ？」

シェリーのその言葉でレイドはリリースが言っている事を信じ、話しを進めた。

レイド 「え」と、仮にもお姫様がどうして俺（魔王）が住む島なんか一人で攻め込む様な真似をしたんだ？それとどうやってこの島に来たんだ？この島の周りには俺の力で渦潮とか竜巻が発生してたはずなんだけど？」

レイドの問いに対してファイアは紅茶を一口飲み答えた。

ファイア 「まず、この島にどうやって来たかと言いますと、私の召喚獣で空を飛び、光の反射能力で竜巻を消して上陸しました、そしてこの島に来た理由ですけど」

ファイアはそこで言葉を区切り一言……

ファイア 「ついでです」

レイド&シェリー&リリース

「「「は？」「」」

これには流石のレイド達も素で反応してしまった。

レイド 「ファイア？、ついであってどう言う意味だ？」

レイドが意味が解らないと言った風にファイアに尋ねた。

ファイア 「ついではついですが、家出したついでに皆が脅おびえている魔王を倒そうとしただけです」

レイド&シエリー&リリス

「「「は？」」「」」

ファイアその言葉に、本日二度目の「は？」が炸裂した。

ファイアは何かを思い出したらしく表情は険しいものになっていた。

ファイア 「だいたい！お父様はいつも勝手過ぎるんです！私に何の断りもなく！」

レイド 「ファイア？」

リリス 「おい…レイド…あいつは一体どうしたんだ…？」

レイド 「俺にも解らん……」

リリスがレイドに小声で話し掛けるとレイドも小声で答えた。

レイド達が小声で話しをしてる中ファイアの言葉はまだ続いていた。

ファイア 「勝手に婚約者とか決めて！結婚しろだなんて！何処の誰だか知らない馬の骨なんか嫁ぐなんて私は真っ平ごめんです！」

レイド&リリス

「（あゝ成る程……」

このお姫様は勝手に決められた婚約が嫌で家出して来たのか……」

ファイアの言葉で大体の事情を察したレイド達だったが……

レイド 「（だけど……俺ってついで何て言う理由で命を狙われる程軽い存在なのか？）」

レイドは少し凹ってしまった。

そんな中シェリーだけは二人とは違う反応を示していた。

シェリー 「（そんな理由があつただなんて！）」

シェリーはファイアの方に駆け寄りファイアの手を両手で掴んだ。

ファイア 「へ？」

シェリー 「何て酷い話し何でしょう！勝手に結婚相手を決めるだなんて貴方のお父様は酷すぎます！」

シェリーの行き成りの行動にレイドとファイアはキョトンとしていた。

レイド 「おい……リリス……シェリーは一体どうしたんだ？」

レイドがリリスに小声で聞くとリリスも小声で答えた。

リリス 「姉さんは自分の意思に関係無く物事を勝手に決められるのを何よりも嫌う人だからあのファイアって言う子の話しに何か思う所があつたと思う……」

レイド 「成る程…」

レイドがリリスの説明で納得していると最初はキョトンとしていたファイアもシェリーは自分の話しを理解してくれると解ると言葉を続けた。

ファイア 「解つてくれるのですか!?!」

シェリー 「解りますとも、女性にとって結婚とは幸せを手に入れる為の神聖な儀式、それを何処の誰だか知らない人に嫁げだなんて貴方のお父様は何て酷い人何ですか!」

シェリーのその言葉に感動した様にファイアはシェリーを見詰めた。

レイド 「そうなのか…?」

リリス 「知らん…」

レイドはリリスにシェリーが言っている事が本当かどうか聞いたがリリスは額をひたい抑え短く返答した。
すると…………

シェリー 「魔王様!」

レイド 「はい!?!」

シェリーが行き成りレイドの名を呼びレイドはシェリーの余りの迫力に声が裏返ってしまった。

シェリー 「お願いです！この方を暫くこの城に泊めて貰ってはいませんか！」

レイド&リリス

「「は？」」

シェリーの言葉で本日三度目の「は？」が炸裂した。

ファイア 「お願いです！私何でもしますから此処にいさして下さい！」

ファイアもシェリーに負けじとレイドに頼むがレイドはどうしたものかと考えていた。

シェリ&ファイア

「うるうるうる (例えるなら、捨てられた子犬の様な目)…」

レイド 「(やめろ！そんな目で俺を見るな！、て言うか何でシェリーまで俺をそんな目で見る！)」

そして……

レイド 「解ったよ……」

好きなだけ此処にいて良いからその目は止めてくれ…、はあ〜」

レイドはついに折れた。

レイドは疲れた様に息を吐くとリリスがレイドに聞いた。

リリス 「本当に良いのか？あいつはお前の命を狙って来た奴だぞ？」

レイド 「仕方ないだろ……？あんな目をされたら……」

レイドが疲れた様に答えるとリリースも、確かに……と呟いてフィアの取り調べは以上の事で終わった。
そして……

此処は王座の間

兵士A 「皆集まれって一体何なんだろうな？」

兵士B 「さあ？おっ、魔王様が来たぜ」

兵士や使用人が王座の間に集まりレイドを来るのを待っていると何か疲れた顔をしているレイドが姿を現した。

一同 「（何か疲れてないか魔王様？）」

レイド 「はあ、えと皆に暫くの間此処に滞在する事とになったお姫さん紹介する、はあ、入っ来ていいぞ……」

一同 「……は？」「」「」

レイドの言葉で本日四度目の、が炸裂した。
すると右側の扉が開き、先程の侵入者の少女が入ってきた。

フィア 「どうもフィア・レイ・クリステイナです 皆さんこれからはよろしくお願いします」

フィアが上機嫌で挨拶すると……

一同 「……………はあああああああ！?!?!?!」

一拍置いて兵士や使用人達の叫びが魔王城に響き渡った。

兵士A 「どう言う事ですか!?!」

使用人A 「ちゃんと説明して下さい!?!」

大勢の兵士や使用人がレイドに押し寄せた。

レイド 「ちょ!?!?ちゃんと説明するから離れろ!」

そしてレイドは皆に事の成り行きを説明したが兵士、主に男性陣が納得いかないらしく反対した。

兵士A 「俺は反対です!命を狙って来た奴を泊めるなんてどうかしています!」

兵士B 「俺もです!もう一度お考え下さい魔王様!」

その時……

シェリー 「ならば貴方達は責任が取れるのですか?」

シェリーの身体から魔力が噴き上がった。

シェリー 「もしこの方が望まぬ結婚で不幸になったらどうするのですか?貴方達にその責任が取れますか?」

シェリーの魔力に当てられて兵士達は押し黙った。

シェリー 「他にまだ反対だと言う方は？」

兵士一同 「……………」

シェリー 「よろしい、フィアさん よかったですね」

シェリーが振り向きフィアに微笑んだ。

フィア 「はい ありがとうございます」

フィアも笑顔でシェリーに御礼を言った。
それを見ていたレイドは……

レイド 「(こっこええええええ!!!)」

シェリーを怒らせない様にしようと固く心に誓ったのだった。

そしてシャイナ・ダルクの日が沈み夜がやってきた。

皆を解散させたレイドはフィアを部屋に案内し、いつも通りに食事をし、いつも通りに風呂に入り部屋に戻りベッドに潜り込んだ。

レイド 「やべえまじで今日疲れた……」

レイドがそう呟くと誰かが扉をノックした。

ステイリア 「あの、魔王様あ？」

レイド 「何だステイリアか、どうした？」

ステイリアが部屋に入って来たのでレイドは起きてベッドに座りステイリアの方を向いた。

ステイリア 「え」とそのお実は今日一緒に寝て欲しいんですけど良いですか？」

ステイリアは恥ずかしいのか顔を真っ赤にしてレイドに言った。
レイドは特に気にした風でもなく笑みを浮かべ了承するとステイリアは嬉しそうにレイドの方に向かった。

二人がベッドに入るとステイリアが話し掛けてきた。

ステイリア 「魔王様あ本当に良かったんですか？」

レイド 「何が？」

ステイリア 「侵入者の事です」

レイド 「ああ、別にいいさ、フィアはもう俺を狙う様な真似はしないだろうし、新しい家族が出来た感じで少し嬉しいし、ステイリアはどうだ？」

レイドがそう言うとステイリアは…

ステイリア 「私もまた賑やかになりそう楽しんでます」

と言って微笑んだ。

レイドはステイリアの言葉に満足し頭ん撫でた。
ステイリアは気持ち良さそうに目を細めた。

レイド 「それじゃあステイリア、お休み」

レイドの手が頭から離れるとステイリアは少し名残惜しそうにしていたがすぐに笑みを浮かべて…

ステイリア 「お休みなさい 魔王様あ」

と言って目を閉じた。

レイドも目を閉じ二人は眠りについた。

こうしてシャイナ・ダルクの騒がしい一日は幕を閉じた。

そして……

明日のシャイナ・ダルクは今日よりも騒がしい一日になるのだろうか？

それは明日になって見なければ誰にも解らない。

願わくば魔王が無事であることを……

新しい仲間？（後書き）

作者 「……………つかれた」

レイド 「俺も今日はマジで疲れた…」

リリース 「お前ら大丈夫か？」

作者&レイド

「何とか…」

リリース 「そうか…、所で今日は何を説明するんだ？」

作者 「いや今日は特に説明しなきゃいけない所はない…」

レイド 「そうなのか？」

作者 「ああ、魔刀や魔眼については次の話して説明する予定だしな、あと気力が残ってれば他にも何か説明する予定だし」

リリース 「ふん、じゃあ今日はこれで終わりでもいいのか？」

作者 「そうだな…」

もう眠いし終わりにするか…」

作者&レイド&リリース

「それでは皆さんまた次回まで」

作者&レイド

「「がくっ……………」」

リリス 「おい！レイドに作者大丈夫か！」

作者&レイド

「もう…、無理……………」

ブツっ……………」

日常編 1 (前編) (前書き)

作者 「お待たせしました！それと先に謝らせて下さい、ごめんなさい！」

日常編1 (前編)

ファイア 「ふふふ〜ん ふふふふ〜ん」

魔王城の廊下をファイアは鼻歌まじりに歩いていった。

そして一つの扉の前に差し掛かるとファイアはノックをして扉を開けた。

ファイア 「レイドさん おはようございます」

扉を開けると気持ち良さそうに寝ているレイドの姿がそこにあった。ファイアはレイドの方まで歩きベッドに掛かっている布団を一気に捲つると絶句した。

ファイア 「なっ!?!? なんな何してんですか!?!」

ステイリア 「うう〜ん」

布団を捲るとレイドの腕に幸せそうに抱き着いているステイリアがいた。

ステイリアの服装は可愛らしいピンク色のパジャマを着ているがポタンが所々外れ可愛いお腹が顔を出していた。

ステイリア 「魔王様あ、そんな所を触ったら撥くすくつたいよお」

ステイリアは一体どんな夢を見ているのだろうか?

ステイリアの寝言を聞いたファイアの中で何かがはじけた。

ファイアは枕元にあった厚さ4cmの本を手に取り……

ファイア 「こんの変態色欲ロリコン魔王が〜!!」

レイド 「げごふっ!?!?!?!」

怒号一発持っている本を振り下ろした。

ステイリア 「う〜んふわあ〜、魔王様あ何をしているんですかあ
〜?」

ステイリアは余りの騒がしさに目覚めると隣で寝ていた筈のレイドがベッドから転げ落ち、床に腹を抱えて疼くまっていた。
するとレイドは恨みがましくファイアを睨んだ。

レイド 「ファイア?、お前は俺を起こしたのか?、それとも 永遠の眠りに就かせたいのか?」

レイドがそう言うつとファイアも負けじと睨み返した。

ファイア 「レイドさんこそ一体何をしてるんですか!まだ幼いこんな幼気な女の子を夜伽の相手にするだなんて最低です!」

レイド 「誤解だあああああ!」

ファイアの勘違いな発言にレイドは顔を赤くし反論した。

レイド 「俺は一度も夜伽なんて誰かにさせてないし!昨日だってステイリアと一緒に寝てくれて頼んで来たから一緒に寝ただけだ!」

ファイア 「男の癖に言い訳なんて見苦しいだけです!」

レイド 「だ〜か〜らあ〜!! スティリア! お前から何か言っ
やれ!」

レイドがスティリアに話しを振るとスティリアは何が何だか解らな
いと言った風に首を傾げた。

スティリア 「え〜とファイアお姉ちゃん? 余り魔王様を困らせちゃ、
めっだよ?」

取り敢えずスティリアはレイドが困っている様なのでファイアを注意
したが……

ファイア 「かつ可愛い〜!、スティリアちゃん! もう一回私のこと
を、お姉ちゃん、って呼んでみて下さい!」

ますますヒートアップした。

スティリア 「え〜と、お姉ちゃん?」

ファイア 「くう〜! 可愛い過ぎですスティリアちゃん! こうなっ
たら私がスティリアちゃんの貞操を守りますから安心して下さい!」

レイド 「もうどうにでもしてくれ……」

レイドが疲れた様に呟くとシェリーが部屋に入って来た。

シェリー 「一体何を騒いでいるのですか? ……何があったので
すか?」

部屋に入ったシェリーの瞳に映ったものは、疲れた顔をしているレイドに、ステイリアに抱き着き頬擦りをしているファイア、それと少し困った様になっているステイリアの三人だった。

するとシェリーの存在に気が付いたファイアがステイリアを抱き抱え、シェリーに詰め寄った。

ファイア 「いい所で来ました聞いて下さい！レイドさんが！レイドさんが！」

ファイアの説明が始まってから5分後…

シェリー 「ステイリア？、また貴方は魔王様と一緒に寝て」

ステイリア 「えへへ ごめんなさ〜い」

シェリーが困った様にステイリアに言うとステイリアは特に悪びれもなく謝った。

そんなシェリーの反応を見てファイアは…

ファイア 「あの〜怒らないんですか？」

訝し気にシェリーに聞いた。

シェリー 「何故です？」

ファイア 「だってレイドさんがステイリアちゃんと一緒に寝たんですよ？姉としては余りよろしくないんじゃないじゃ…」

ファイアのその言葉にシェリーは苦笑を浮かべた。

シェリー 「ファイアさん、貴方何か勘違いをしていない？」

ファイア 「勘違いですか？」

シェリー 「そう、ステイリアが魔王様と一緒に寝るのは何もこれが初めてじゃないのよ？」

ファイア 「そうなんですか？って言う事はもうレイドさんに…」

レイド 「ちがう！！」

ファイアの再びの勘違い発言にレイドは思わず声を上げた。そんなレイド達を見てシェリーは思わず笑ってしまった。

シェリー 「クスクス、それは大丈夫よ、魔王様は誰彼構わず抱くようなそんな軽率けいそつな方ではありません」

レイド 「シェリー……」

シェリーの言葉にレイドは感動して瞳を潤ませたと、その時…

リリス 「何してんだ？」

リリスが部屋に入って来た。

シェリー 「あらリリスどうしたの？」

シェリーが尋ねるとリリスはやや呆れ顔で言った。

リリス 「どうしたの？じゃないよ、姫さんがレイドを起こしに行
ったきり戻って来ないとかで姉さんが見に行っただけど、その姉さん
も戻って来ないからこうして私が二人を呼び戻しに来たんじゃない
か」

シエリー&ファイア

「ごめんなさい」

リリスがそう言うとシエリーとファイアは素直に謝った。
そこでレイドはあることに気が付いた…

レイド 「そう言えばファイア、何だその格好は？」

ファイア 「あつ、これですか」

レイドが聞くとファイアはその場で一回転して見せた。

ファイアの格好はシエリーと同じふわっとしたスカートに襟元を黄緑
色のリボン&緑色のブローチで止めている黄色の用人服に白いエ
プロンを着用している。

ファイア 「えへへ 似合ってますか？」

レイド 「似合ってるけど…、何でそんな格好してるんだ？」

ファイアがはにかんだ様に聞くとレイドは素直に答えたが何故ファイア
が用人服など着ているのか解らなかつたので聞いて見るとファイア
はとびつきりの笑顔を浮かべ…

ファイア 「私、今日からこの城で使用人として働く事にしました」

レイド 「……………は？」

その言葉を聞いたレイドの時間が止まった。

此処は食堂…

レイドが固まっているとシェリーが朝食を取りながら説明すると言
い出したのでレイド達は食堂に来ていた。

無駄に長いテーブルの先端にレイドが座りその斜め前にファイア、向
かい側にシェリーが座った。

レイドは目の前にあるトーストを一口齧^{かじ}って口を開いた。

レイド 「で、働くなってどう言う訳だ？」

レイドがそう言うこと…

ファイア 「それはですね、やっぱり暫く此処に泊まるなら私も何か
しなくてはいけないと思ひまして昨夜シェリーさんの部屋を尋ねた
ら、それなら使用人の仕事をして見ませんか？ と誘われて私も興
味があつたので使用人として今日から働く事にしました。」

ファイアが何が楽しいのか楽しそうに、にこやかに言った。

レイドはファイアの言葉を聞いてシェリーの方を向くとその視線に気付いたシェリーも笑みを浮かべながら口を開いた。

シェリー 「別によろしいと思いますよ？本人がやりたいと言うのなら私は止めようとは思いませんし、それに人手が増えるのは助かりますし」

レイド 「いくら本人の意思だからって仮にもお姫様だぞ？働かすのはまずいだろ？」

シェリーの言葉にレイドがそう言い返すと…

ファイア 「大丈夫です！私こう見えても家事は得意なんです！」

レイド 「いや、そう言う意味じゃなくて…」

ファイアは立ち上がって僅かに膨らみがある胸を張ってそう言った。

ファイア 「それに私、一度でいいからこうゆう服を着てみたかったです、お城の服は窮屈で動きにくくて、それに比べたらこっちは動きやすくて、可愛いし、お願いです！私を此処で働かせて下さい！」

ファイアの縋る様な瞳に…

レイド 「（おいおい、頼むからそんな目で俺を見るな！）」

シェリー 「大丈夫ですよファイアさん 魔王様は此処まで頼んでくれるのに断る程そんな非情な方ではありません」

レイド 「（シェリーイイイイ！お前何言ってるの！？）」

レイドは残りのトーストを食べ終わるとテーブルに突っ伏した。

レイド 「はあく、まじで疲れた…、つてもうこんな時間か」

レイドが後ろにある時計を見ると8:30を廻まわっていた。

レイドは椅子から立ち上がると食堂を出て行き、城門へと歩いて行った。

門の近くまで行くと何人かの兵士や騎士が集まっていた。

リリス 「やっと来ましたか、魔王様」

リリスがそう言うと集まっていた騎士や兵士の者達がレイド方を向いて整列した。

レイド 「わりい遅れちまって（相変わらず騎士や兵士達の前だとその口調なんだな）」

レイドは心の中で苦笑しながら皆に謝るとリリスは仕方が無いと言った風に溜め息をついた。

リリス 「はあく、それでは行きましようか？魔王様」

リリスのその言葉でレイド達は門の外へと歩きだした。

ファイア 「あれ？そう言えばリリスさんと何人かの騎士や兵士さんの姿が見えませんが、何処に行っただんですか？」

中庭では、シエリーと何人かの使用人と共に洗濯物を干しているファイアが城にいる者達が少し消えている事に気が付きシエリーに聞いて見た。

シエリー 「ああ、いつもやっている模擬戦をしに行っただと思いませんよ」

ファイア 「模擬戦ですか？」

シエリー 「ええ、流石に全員連れて行くのはもしもの時に大変なので何人か残って城の警備をしてもらっていますけど、日替わりで魔王様に皆鍛えてもらっているんですよ」

ファイア 「へえ、ってはい？」

シエリーの話しを聞いていたファイアは持っていたシーツを落として

しまった。

ファイア 「あ、すつすいません！」

ファイアは急いで地面に落ちたシーツを拾って払うとシェリーの方を向いた。

シェリー 「どうしました？」

ファイア 「いえ、少し驚いてしまっただけです、レイドさん直々にリリースさん達の特訓に付き合っただなんて」

と、その時……

ズドウオオオオン！！！！

遠くの方で爆発音の様な音が轟いた。

ファイア 「シェリーさん……、今の音は……」

シェリー 「いつも魔王様達おこなが模擬戦を行っておこないる方向から聞こえましたね……」

ファイア 「大丈夫なんですか？」

ファイアが聞くとシェリーは苦笑いを浮かべながら答えた。

シェリー 「大丈夫だと思いますよ……多分」

ファイア 「……………（兵士さん達、生きて帰って来て下さいね）」

最後の方に不安な言葉を言ったシェリーを見て、フィアは皆の無事を祈った。

時は少し遡り^{さかのほ}一方レイド達は西に行った所にある岩場に来ていた。

リリス 「それでは魔王様準備はよろしいですか？」

レイド 「ああ、いつでもいいよ」

リリスの言葉にレイドは剣を抜いて返事をした。

リリス 「それでは……」

リリスが剣を抜くと騎士や兵士達も剣を抜いた。

リリス一同

「「「お願いします！」」」

こうしてリリス達との模擬戦が始まった。

模擬戦の内容はレイド対多数で戦闘を行うと言うものでレイドに一撃でも入れられたらリリス達の勝ち、全員が負けを認めるか戦闘不

能になったらレイドの勝ちと言うものだ。
数は、リリスを含める騎士3人、兵士が6人で今日の模擬戦を始める。

リリス 「はあああああ!!」

リリスは横に剣を薙ぎ払い、レイドはそれを剣で防ぐ、リリスはすかさずバックステップで距離を取るとその横をいくつかの火球が通り過ぎ、レイドに向かった。

レイド 「魔天流：攻めの陣一式・魔影牙！」

レイドは黒い斬撃を放ち、火球を消し去ると後ろ蹴りを繰り出した。

兵士A 「うっ！」

するといつの間にかレイドの後ろへと接近していた兵士の一人が吹っ飛び岩に激突した。

レイド 「成る程な、敵を引き付けて置いてその間に誰かが後ろから斬り付ける、シンプルだけど有効な手段だな」

レイドはそう言って指を弾いた。

すると吹き飛ばされて気絶している兵士の周りに薄い黒い壁の様な物が複数現れ兵士を囲んだ。

リリス 「詠唱破棄のダークウォールですか」

レイド 「まあな、巻き込まれたら大変だろ？、この魔法なら大体の攻撃は防いでくれ…ってうわっ！あぶねえ!？」

レイドの話しが終わらない内に兵士の3人が斬り掛かってきた。

兵士B 「魔王様、いくら模擬戦で言ったって一応戦いですよ?」

兵士C 「べらべらと喋っべっていたら駄目じゃないですか」

兵士D 「お前ら…、魔王様に向かってなんちゅう口の聞き方を…」

レイドは兵士達の剣撃を躲し距離を取ると笑みを浮かべた。

レイド 「確かに戦闘中にお喋りなんて良くないな、注意してくれ
た礼だ受け取ってくれ」

レイドはそう言うと剣に闇が螺旋を描き纏わり付いた。

レイド 「魔天流：攻めの陣二式・黒鎖コクサレンソウゲキ連葬撃」

レイドが剣を地面に突き立てるとレイドの周りに六つの黒い穴の様な物が地面に空き、一つの穴につき四つの先の尖った黒い鎖が計24つ兵士達に放たれた。

兵士一同 「しまっ!?!」

残っていた5人の兵士は鎖に身体を巻き付かれ、拘束されてしまっ
たが…

リリス 「全てを凍てつかせる冷酷なる冷氣よ…」

騎士(男) 「全てを燃やし尽くす灼熱の炎よ…」

騎士（少女） 「世界を包む優しき風よ…」

リリスの周りに冷気が集まり、男が持っている大剣に炎が宿り、少女の身体を風が包み込む。

リリス 「大地を貫く氷柱ヒョウとなれ！」

騎士（男） 「我が剣に宿りて邪悪を払え！」

騎士（少女） 「逆巻く烈風となれ…」

リリスの足元の地面が凍り付き、男の大剣が紅く光りを発し、少女を包む風が激しさを増した。

リリス 「大地を貫く氷結の牙！アイスファング！」

リリスが魔法名を叫ぶとまるで主を護るかの如くリリスの周りに巨大な氷柱が出現した。

騎士（男） 「獄炎を纏う剣！プロミネンスソード！」

男が魔法名を叫ぶと男が持っている約一メートルはある大剣がさらに巨大化し三メートルはある紅く輝き炎を纏う巨大な大剣が姿を現した。

騎士（少女） 「吹き荒れる風！ストーム…」

少女の周りに巨大な竜巻が五つ出現した。

リリースへと向かっていた鎖は氷柱に阻まれ、男は巨大な大剣で向かって来る鎖を断ち斬り、少女は竜巻を操り鎖を弾き返した。

レイド 「やるな、リリースにバロン、それとエルネ」

レイドはそう言つと地面に突き刺している剣を抜いた。剣を抜くと鎖は消えて捕らえられた兵士達は自由になった。

レイド 「取り敢えずお前達は戦闘不能つて事で」

レイドがそう言つと兵士達は不満そうな顔をした。

兵士B&C 「酷いじゃないですか！行きなりあんなの出すなんて！」「」

兵士E 「お前達何てまだ増しじゃねえか！」

兵士F 「こつちなんて最初の火球出した所以外全く出番が無いんだぞ！」

兵士D 「こいつらは……」

兵士達が次々に文句を言つと（一人疲れた様になっている…）レイドは苦笑を浮かべた。

レイド 「悪かったよ、次はもうちょっと手加減するからそれでいいだろ？」

兵士B C E F

「「「それはそれでムカつきます！」「」「」

兵士達の言葉でレイドは思わず笑ってしまった。

レイド 「ぷっ、解ったよ、それなら今度俺が魔法を教えてやる、それで機嫌直せ、な？」

兵士B C E F

「「「「本当ですか!?!」「」「」

レイドの言葉で兵士達の不満の表情が消えた。

兵士D 「(なんて現金な奴らだ…)」

レイド 「本当だ、お前達6人に魔法を一つづつ教えてやる」

兵士B C E F 「ありがとうございます!魔王様」

レイド 「それじゃあ取り敢えずあそこで倒れてる奴に掛かってる魔法を解くからそいつを連れて離れていってくれ、巻き込みまう可能性はあるからな」

兵士一同 「「「はっ!」「」「」

レイドの言葉で兵士達はその場から離れて行った。

レイド 「それじゃあ始めるか?」

レイドはそう言つと剣を構え直した。

リリス 「行きますよ?」

リリスはそう言うと詠唱を行った。

リリス 「全てを凍てつかせる冷酷なる冷氣よ…」

バロン 「はあああああ！！」

リリスが詠唱を始めるとバロンが三メートルはある巨大な大剣でレイドに斬り掛かった。

リリス 「槍と成りて敵を貫け！」

レイドがバロンの剣撃を避けた所にピンポイントで氷の槍がレイドに降り注いだ。

レイド 「つつ！闇よ…」

レイドが呟くとレイドの前に闇の壁が出現した。
氷の槍は闇の壁に当たり吸収された。

バロン 「まだまだあああああ！！」

バロンの大剣が闇の壁事レイドを吹き飛ばした…様に見えたがバロンが吹き飛ばしたのはレイドが闇で創った自分に似せた影だった。

リリス 「つつ！（一体何処へ！）」

リリスが辺りを見渡したその時…

レイド 「魔天流：攻めの陣一式・魔影牙！」

リリス 「はっ（上か！）」

バロン 「くっ！俺のスピードじゃ間に合わん！」

レイドは魔影牙を空中で繰り出しリリスに直撃すると確信したその時……

エルネ 「風の刃＝ウィンドエッジ……」

レイドの放った魔影牙は複数の風の刃によって相殺された。

レイド 「詠唱破棄のウィンドエッジで俺の魔影牙が相殺された！？」

レイドは少し驚きの表情をしていたが直ぐに体勢を整える為に地に足を付けたその時……

バロン 「チエストオオオオオ！！！」

レイド 「しまっ！！！」

ズドウオオオン！

バロンの大剣がレイドの着地と同時に横薙ぎに払われ、爆発が起こり大量の土煙が空を舞った。

リリス 「（やったのか……？）」

エルネ 「……………」

バロン達の姿は土煙によって見えないがあの爆発を喰らったのなら傷の一つでも負わせられただろうと思ひ二人はバロン達がいた場所を凝視していた。

やがて土煙が消え去るとリリス達は自分の目を疑った。

リリス 「なっ!?!」

エルネ 「そんな……」

そこには……

バロン 「くっ!」

レイド 「あぶなかつた、今の連携は中々良かったぞ」

バロンの三メートルはある大剣を左手一本で止めるレイドの姿がそこにあった。

レイドは左手に力を入れ大剣の刃をへし折るとバロンの大剣から紅い欠片が宙を舞、元の一メートルの鋼の大剣が姿を現した。

バロン 「馬鹿な……」

バロンは瞳を見開きただぼうぜん茫然とレイドを見ていた。

レイド 「さてと、そろそろ時間だから終わらせるとするか……」

レイドはそう呟くと地を蹴り、天高く舞い上がった。

リリス 「はっ」

バロン 「しまっ！」

エルネ 「つつ…」

レイドの行動に我に返ったりリリス達だがレイドはもう攻撃の構えに移っていた。

レイド 「魔天流：攻めの陣三式・黒雷一葬！」
コクライイッソウ

レイドの剣に黒い雷が宿り、もの凄い音が鳴り響いた。

バチ！ バチ ！バチ ！バチ！

レイドは剣を下に構え、高速で落下すると剣に宿っていた黒い雷がレイドにも纏わり付き黒い閃光となった。

ズドウオオオオン！！！！

雷が落ちた様な音がシャイナ・ダルクに鳴り響いた。

レイド 「やべ、少しやり過ぎたか…？」

レイドの周りには直径40メートルぐらいのクレータが出来ていた。レイドはクレータから出て倒れているリリス達に近寄った。

レイド 「直撃はしてないから生きてると思うけど、大丈夫か？」

レイドがそう言つとリリスの指先がピクリと動きレイドの胸倉を掴んだ。

リリス 「お前はあああああ！
私達を殺すつもりか！！！」

リリスの怒号が辺りに響いた。

レイド 「いや、防いでくれるかなって思ったんだけど…」

リリス 「防げるわけないだろおおお！！！」

リリスの怒号をレイドが聞いているとリリスの肩にいつの間にか意識を戻したバロンが手を置いた。

バロン 「リリス副隊長、もうその返でいいでしょう」

リリス 「つつ！失礼しました…」

レイド 「アハハハ…」

レイドがリリスの反応に苦笑いするといつの間にか意識を戻したエルネが口を開いた。

エルネ 「魔王様……少し反省…」

レイド 「はい…」

レイドが暫くエルネの言葉で反省しているとバロンが声をかけてきた。

バロン 「では魔王様、そろそろお戻りになられますか？」

レイド 「そうだな、もう昼頃だし戻るか」

騎士&兵士一同

「「「「はっ!」「」「」

レイドの言葉で今日の模擬戦は終わり、魔王城へと帰った。

ファイア 「どっどっしたんですか皆さん!? ボロボロじゃないですか!」

魔王城に帰ると丁度掃除をしているファイアに出くわした。

レイド 「いや、ちょっと模擬戦に熱が入り過ぎたと言っか何と言っか…」

ファイア 「何がちょっとですか! 此処まで模擬戦をやっている音が響いて来ましたよ!」

レイド 「アハハハハ……」

ファイア 「ごまかさないで下さい!」

レイドがごまかして笑うとファイアが詰め寄った。

レイド 「ちよっ！ファイア、顔が近い！」

レイドが顔を紅くして言うとならファイアも顔を紅くして急いで離れた。

ファイア 「／／／／取り敢えず皆さんは速くお風呂に入ってきて来て下さい！お昼の準備はもう出来ていますから！」

そう言うとならファイアは本城の方へ駆け出して行った。

レイド 「それじゃあ皆、風呂に入るとするか」

レイド達はファイアの言う通りに風呂場へと向かった。

そして風呂場……

レイド 「はあゝ気持ち良い」

バロン 「あの〴〵魔王様？何故我々と一緒の風呂に入っているのですか？魔王様専用バスルームがあるはずですが……」

バロンがレイドが何故此処にいるのか聞くとレイドはまったりとした顔で……

レイド 「別に〴〵、いいだろ？、ほらお前らもいつまでもそんな所にいないで入ってきて来いよ、魔王命令だ」

レイドがそう言うとなら風呂の前で戸惑いの表情をしていた兵士達が戸

惑いながらも入って来た。

レイド 「はあ、やっぱり皆と入る風呂は最高だな」

レイドがそう言つと兵士達が口を開いた。

兵士A 「あの、いいんですか？」

レイド 「何が？」

兵士A 「いえ、私達の様な者が魔王様と一緒に風呂を共にしているのだろうかと思ひまして…」

その言葉にレイドは笑みを浮かべた。

レイド 「いいに決まつてんだろそんな事、だって俺達は家族何だから」

レイドのその言葉を聞いた兵士達は感動した様に瞳を潤ませた。

兵士B 「くう、魔王様優し過ぎです！」

兵士C 「俺達、一生魔王様に着いて行きます！」

兵士達の言葉にレイドは苦笑を浮かべるとバロンが口を開いた。

バロン 「そう言う所はお父上に似ていますな」

レイド 「そうか、ありがとよ、俺は親父の様な立派な王に成れるだろうか…」

レイドが呟くとそこにいる者全員が笑みを浮かべて言った。

全員 「もう成ってますよ、誰よりも優しく誰よりも強い最高で最強な王に」

バロン達の言葉にレイドはもう一度笑みを浮かべて……

レイド 「ありがとう」

とそう言った。

此処は食堂…

レイド 「すげえ、これ全部ファイアが作ったのか？」

風呂から上がったバロン達をはば強引に連れて来たレイドは驚いた様にファイアを見た。

テーブルには、ハヤシライスにサンドイッチ、スープにフルーツの盛り合わせ、など色々な料理が並べられていた。

ファイア 「まさか、ちゃんとシェリーさん達にも手伝ってもらいま

した」

フィアがそう言うとシェリーが苦笑を浮かべて…

シェリー 「いいえ、私達など少し手伝ったに過ぎません、大体はフィアさんがお一人で作ってしまいました」

レイド 「へえ、凄いじゃないかフィア」

レイドがそう言うとフィアは、はにかんだ様に笑った。

フィア 「えへへ、さあ、早く食べて見て下さい」

フィアに促されレイド達は席に着いた。

レイド一同 「いただきます」

レイド達はそう言ってハヤシライスを一口食べた。

レイド&兵士一同

「うまつ!」「」

リリス 「本当に美味しいな」

バロン 「ががつがつ (ひたすら食べている音)」

エルネ 「おいしい…」

フィアは皆の反応を見て嬉しそうに微笑んだ。

ファイア 「皆さん まだいっぱいありますから沢山食べてください
ね」

ファイアの「沢山ある」と言う言葉に男達の食べる速度が上がった。

男共 「「「おかわり〜!」「「「

ファイア 「はい」

ファイアはレイド達から皿を受け取り嬉しそうに注いだ。

それから約10分……

レイド 「あゝ、食った食った」

バロン 「魔王様、行儀が悪いですよ？」

ファイア 「……………（たった10分で全て平らげるなんて…）」

ファイアがレイド達の食いつぶりに唾然としているとステイリアが食堂に入って来た。

ステイリア 「魔王様〜!!」

レイド 「ん？ステイリアか、どうした？」

レイドが聞くとステイリアはポケットから黒い手紙を出した。

レイド 「うそだろ……………」

レイドは手紙を震えながら受け取り中身を読んだ。
そして……

レイドは席から立ち上がるとシェリーとリリス、ステイリアに目線を送り……

レイド 「シェリー、リリス、ステイリア、マテンザン魔天山に行くぞ」

険しい顔でレイドが言った。

シェリー&リリス

「はっ！」

ステイリア 「わぁ〜い」

黒い手紙には一体何と書かれていたのだろうか？
レイドの険しい顔の訳とは？
以後次回につづく！

日常編1 (前編) (後書き)

レイド 「おい作者、前話の後書きで何て書いたか覚えているな？」

作者 「……………」

レイド 「俺の記憶が正しければ確か次話で魔刀と魔眼の説明するって言わなかったか？」

作者 「いや、あれはあくまで説明する予定と言っただけと云っただけか……」

レイド 「言い訳無用！ファイア！」

ファイア 「はい！」

作者 「ちよっ！まっ……」

ファイア 「光の球弾！レイブレット！x16」

ババババババン！

作者 「げぼふっ！？」

レイド 「多いな……………てか詠唱破棄であの数って……」

ファイア 「その分威力が無いので死んで無いと思えますよ？」

レイド 「おゝい生きてるか？」

作者 「死ぬ……」

レイド 「そうか、まあ取り敢えず眠つとけ…、魔影牙！」

ズシャ！

ファイア 「レツレイドさん！今の音は絶対死にましたよ！」

レイド 「あゝ心配無い心配無い 何たって作者だからな」

ファイア 「意味が解らないんですけど…、つて言うよりも今日の説明どうするんですか？作者が生死不明じゃあ出来ないじゃないですか！」

レイド 「あゝ、それは大丈夫、大体説明する事は予想が付いてるから」

ファイア 「じゃあお願いします」

レイド 「おう、えゝとまずは俺が今日使った二つの魔天流についてだな」

ファイア 「そう言えば物凄い音してましたね、どんな技を使ったんですか？」

レイド 「まず一つ目は黒鎖連葬撃だな、これはだंना剣に溜めた闇の魔力を地面に送りこんで地中深くに眠ってる闇を吸収して地面から溢れ出させて自分の魔力でそれを固めて鎖の形にして相手に放つと言う技だな、主な効果は魔力吸収でこの鎖に触れると徐々に魔力を吸収して吸収された魔力は俺のものになるんだ」

ファイア 「何て言う凶悪な技を……」

レイド 「因みに鎖の先に付いてる鋭い杭で相手の身体を貫く事も出来るからこの技は補助も攻撃も両方共できるんだよな」

ファイア 「……………」

レイド 「何だよその目は」

ファイア 「いえ、何でもありません……（まだ一式なのにどれだけ強いんですか！）」

レイド 「そうか？じゃあ次にいくか」

ファイア 「あの物凄い音がした奴ですか？まるで雷が落ちたような音でしたけど」

レイド 「おつ、好い線行ってるな」

ファイア 「好い線ですか？」

レイド 「おつ、その技は黒雷一葬って言ってな雷属性に闇属性を加えた技だ」

ファイア 「へえ、て雷属性の魔法も使えるんですか！？」

レイド 「ああそう言えば言って無かったけど、俺は全属性の魔法を使えるんだよ」

ファイア 「……………はい？」

レイド 「まあ普通はそんな反応だろうな」

ファイア 「ちよつちよつと待って下さい！全てって全ての属性をですか！？そんなの不可能です！」

レイド 「まあその理由はいつか本編で解ると思うから魔天流の説明に戻るぞ」

ファイア 「解りました…、絶対に説明してもらいますからね」

レイド 「おう、じゃあ魔天流の説明に戻るけど、この黒雷一葬は天高く跳んで闇属性を交ぜた雷を剣に纏わせて高速落下する技で落下する時に自分に雷を纏わせる事でスピードと威力を上げてるんだけど一直線上に落ちるから直撃は難しいんだよな、それでも物凄い威力だから自分の周りを木っ端みじんに吹き飛ばす事が出来るんだけどさあ」

ファイア 「因みに吹き飛ばすと言うとどのくらい何ですか？」

レイド 「うーん、良く解らないけど本気でやれば直径70メートルのクレータは出来るんじゃないね」

ファイア 「どれだけ貴方は規格外何ですか……………」

レイド 「因みに親父がブチ切れて黒雷一葬を使ったら直径100メートルはぶつ飛んだって母さんに聞いた事がある」

ファイア 「ひゃく……………」（本当に魔王の方々は私達と同じ人間なん

でしょうか？」

レイド 「おいファイア、お前何か失礼な事考えてるだろ？」

ファイア 「そつそんな事全然考えていませんよアハハハハ」

レイド 「……………何か怪しいけどまあいいや」

ファイア 「ほっ」

レイド 「因みに俺の黒雷一葬はディシディアってゲームに出て来るセフィロスって奴が使ってる、獄門、って技を元に行っているらしいぜ、まあ威力は俺の方が明かに上らしいけどな」

ファイア 「へえ、他に何か説明する事はありますか？」

レイド 「無いけどあそこで寝てる作者の……………っていねえ!？」

作者 「いてえ、げっ、指先が少し切れてるな」

ファイア 「いついつの間に復活したんですか…?とつかレイドさんの魔影牙を食らって指先が切れただけって…」

レイド 「だから言っただろ?大丈夫だって」

作者 「何が大丈夫だ!大した怪我はしてないけど衝撃はかなりのものだぞ!」

レイド 「それよりも作者、お前何か言う事があるんじゃないのか?」

作者 「そうだった！え〜とこんな無理矢理な終わらせ方で申し訳
ありませんでした！」

ファイア 「そう言えばかなり無理矢理に終わらせましたよね…」

作者 「本当はもっと書くつもりだったんだけどさあページ数が絶
対に足りないし、切りの良い所も見つかなくて、はば強引に終わ
らせる結果になったんだよな」

レイド 「本当に作力ないよなこの作者」

作者 「グサツ （作者の心に槍が刺さった音）」

ファイア 「私、何だか本当に完結してくれるのか心配になって来ま
した」

作者 「グサグサツ （槍が二本心に刺さる音）」

レイド&ファイア

「はあ〜 （大きな溜め息）」

作者 「俺を見て溜め息つくな〜！！安心しろ！俺は絶対にこの話
しを完結させる！」

レイド 「安心出来ないな」

ファイア 「できませんね」

作者 「ズドツ （作者がこけた音）」

作者 「お前らなあ!」

レイド 「ほら、もう言う事が無いなら今日は終わりにするぞ」

ファイ 「それじゃあいつものやりますか」

作者 「せいの」

作者&レイド&ファイ

「それでは皆さんまた次回まで」

ブツッ……………

日常編 1 (後編) (前書き)

作者 「お待たせしました、今回は少し遅めで申し訳ありません！
それでは本編をどうぞ」

日常編1 (後編)

レイド 「シエリー、リリス、ステイリア、魔天山に行くぞ」

シエリー&リリス

「はっ！」

ステイリア 「わぁ〜い」

レイドのその言葉でシエリー達は動き出した。

フィアは何が何だか解らないと言った風にシエリーに尋ねた。

フィア 「シエリーさん、何でレイドさんはあんな険しい顔をしてるんですか？まるで死地に赴く様なおもむそんな顔をしてるんですけど…」

シエリー 「それはですねきっと今からご両親に会いに行くからだと思います」

フィア 「両親…って前魔王と…」

シエリー 「そのお妃様です」

シエリーの言葉にフィアは余計に解らなくなった。

フィア 「自分の両親に会いに行くのになんでレイドさんはあんな顔をしているんですか？」

フィアが聞くとシエリーは苦笑を浮かべながら困った顔をした。

シエリー 「それは……、ちょっと待っていて下さい」

ファイア 「?????」

シエリーはレイドの方に歩き出しレイドと何か話していたが話しが終わったのかファイアの所まで戻って来た。

シエリー 「ファイアさん、今から貴女あなたも連れていきますから私達と一緒にについて来て下さい、きっと魔王様の表情の訳が解ると思いますよ？」

シエリーはそう言ってファイアの手を掴みレイド達と共に食堂をでた…

兵士達 「」「」「魔王様、どうかご無事で……」「」「」

バロン 「魔王様は大丈夫だろうか……」

エルネ 「平気……多分……」

食堂に残させられた者達はレイドの無事を祈っていた。

ステイリア 「準備良いですか」

ステイリアは元気な声で大きく言った。

レイド達は今、城の地下にあるとある部屋に来ていた。

ファイア 「これって魔法陣ですよね…？」

部屋はかなり広く床には巨大な魔法陣が描^{えが}かれていた。

レイド 「ああこれはステイリアが描いた転送魔法の術式を練り込んだ魔法陣だな」

ファイア 「これファイアちゃんが描いたんですか!？」

ファイアは驚いた様にステイリアを見た。

ステイリア 「えへへ 魔王様の役に立ちたくて私いっぱい勉強したんだよ」

レイド 「ありがとうステイリア」

レイドはそう言ってステイリアの頭を撫でるとステイリアは気持ち良さそうに目を細めた。

ステイリア 「ふにゃ〜」

レイド 「さてと、ステイリアそろそろ頼む」

レイドはそう言って手を戻した。

レイドの手が頭から離れるとステイリアは少し名残惜しそうにしていたが魔法陣の中央に歩いて行き詠唱を行った。

ファイア 「そう言えば魔天山って言う所…、何処かで聞いた事があるんですけど、何処にあるんですか？」

レイド 「ああ、今は名前が変わっているんだっけ、魔天山って言うのは今で言う魔巢山マノウザンの事で、初代魔王が魔天山で編み出した技が魔天流なんだよ」

ファイア 「そんなんですか？ってそれよりも…、魔巢山って確か名前の言う通り魔物の住家になっていて魔物以外の生物はいない所ですよね？そんな所で暮らしているんですかレイドさんのご両親は…」

レイド 「まあ、魔物しかいないかわりに人もいないしな、夫婦水入らずで幸せに暮らしてるよ…っとステイリアの詠唱がもうすぐ終わるな」

ファイアとの話しに夢中になっているとステイリアの詠唱がもうすぐ終わろうとしていた。

ステイリア 「空間転移〓テレポレーション！」

ステイリアが魔法名を叫ぶとレイド達は激しい光に包まれ、やがて光が止むとレイド達の姿は消え、辺りに静寂が訪れた。

ファイア 「うっ…、此処は…？」

激しい光で目を瞑^{こむ}ってしまったファイアが目を開けると目の前に大きな屋敷が存在しており、周りには色取り取りの花が咲いていた。

レイド 「どうしたファイア？」

動こうとしないファイアを訝しげに思いレイドが喋りかけるとファイアははっと、我に返るとレイド達の元へと駆け寄った。

ファイア 「いえ、ただ自分が思っていた所と違っていて余りにも綺麗な所につい見取れてしまいました」

レイド 「まあ此処は結界の中だからな、外に出れば、邪気、に侵された草木や魔物がうじゃうじゃといるよ」

ファイア 「……………結界ですか？」

レイド 「そっ、この屋敷の周辺は母さんが張った結界で邪気から護られていて、それで此処だけ花を咲いてるんだよ」

レイド達が話していると……

リリス 「いつまで話しをしてるんだ？早く行くぞ」

少し先に進んでいるリリスに呼ばれ、レイド達は歩きだした。

レイド 「はあゝ、やべえまじで帰りてえ」

扉の前まで来たレイドは溜め息を吐きながらも扉の取っ手に手を掛け、手前に引いた。

レイド 「ただい…げふお！！！」

???? 「レイちゃん お帰りなさい！！！」

レイドが扉を開けると中から物凄い速さで何かが飛び出して来てレイドを吹き飛ばした。

シエリー&リリス&ステイリア

「……………」

ファイア 「……………へ？」

シエリー達の目の前でレイドと飛び出して来た何かは数回地面を駆け回り、シエリー達と50メートルぐらい離れた所でやっと止まった。

シエリー達は何が起こったのか理解できなかったが、数秒経ってレイドが吹き飛ばされた事に気が付き急いでレイドの下に駆け寄った。

シエリー&ステイリア

「…まっ魔王様!?!」

リリス 「おいレイド！大丈夫か!?!」

ファイア 「……………(だれ?)」

シエリー達がレイドに駆け寄るとレイドの腹部に黒髪の小さな女の子が馬乗りで座っていた。

「????」「ううう、寂しかったよレイちゃん」

女の子はそう言って涙を流しレイドに抱き着いた。

レイド「まっ……て……さっ……きの……で……あた……まが……みぞおち……に……」

対するレイドは女の子の先のタツクル(?)が鳩尾に入った様で息も絶え絶えになっていた。

ファイア「あの〜シエリーさん、あの子は一体何者なんですか?」

シエリー「ファイアさんは、誰だと思えます?」

ファイアの問いにシエリーは笑みを浮かべて聞いた。

ファイア「レイドさんに何処か似ていますから妹さんか何かですか?」

ファイアがそう答えるとシエリーは首を横に振り否定した。

シエリー「違いますよ」

ファイア「じゃあ誰なんですか?」

シエリー「それはですね……」

シェリーが女の子について喋ろうとした瞬間、辺りに奇妙な音が鳴り響いた。

ゴキ ボキ ゴキユ!

シェリー&ファイア

「「……………へ?」」

レイド 「ちょ…っ…ま…じで…はな…し…て…………」

リリス 「アリス様!それ以上レイドを抱き締めたら死んでしまします!」

ステイリア 「ふえ〜、魔王様が死んじゃうよ〜」

どうやらこの女の子の名前はアリスと言うらしい、リリスとステイリアはアリスを止めようとするが対するアリスはと言うと…

アリス 「やだっ!まだレイちゃんに抱き着いていたいもん!」

この一点張りである。

すると…………

???? 「おいアリス!レイド達が来たって言って一向に帰って来ないから来て見れば、お前は一体何をしてるんだ!」

男が走って来てアリスを無理矢理レイドから引き離した。

アリス 「クラウド痛いよお〜」

男の名前はクラウドと言っらしい。

アリスは口を尖らして非難がましくクラウドを見るがクラウドはそんなアリスをスルーして…

クラウド 「レイド、大丈夫か？」

レイドの方に寄った。

レイド 「だ…いじ…よ…うぶ…あ…の…かわ…を…わた…れば…い…いん…だろ…？」

レイドはそう言って立ち上がると覚束ない足取りおぼつかで歩きだした。

ファイア 「その川は渡っちゃ駄目ですよー！！」

ファイアは急いでレイドに駆け付けるとレイドは倒れた。

レイド 「此処…ま…でか…」

ファイア 「わあああ！！レイドさん！！」

ファイアは倒れたレイドを何とか受け止めるとクラウドが近寄って来てファイアに抱かれているレイドを肩に担いだ。

クラウド 「取り敢えずレイドは大丈夫だから皆中に入ろうか？」

クラウドはそう言つと屋敷に向かって歩きだすとシェリー達もクラウドの後を着いて行った。

此処は屋敷の中にあるとある小部屋……

中央に置いてある円形のテーブルに4人が座っていた。

一人はクラウドに運ばれている途中に目覚めたレイド、その向かい側にいるクラウド、レイドの左側にいるフィアに、クラウドの左側にいるアリスとなっている。

シェリーとリリス、そしてステイリアはレイドの後ろに立っている。

クラウド 「来た早々災難だったなレイド」

レイド 「アハハハハ……」

クラウドが口を開くとレイドは苦笑いで返した。
すると今度はアリスが口を開いた。

アリス 「ところでレイちゃん、その女の子ってもしかしてレイちゃんのこれ？」

アリスはそう言って右手の小指を立てた。

レイド&フィア

「「……………はい？」」

アリスの言っている事が理解できなくてレイドとファイアは呆けた様な顔をしたが、直ぐに言われた事を理解するとレイドとファイアは顔を一気に紅くした。

ファイア 「ノノノノノノノノノノノノノノ！私とレイドさんが…はわわわわああ…！！ノノノノノノノノノノノノ！」

レイド 「ちょ！ファイア！取り敢えず落ち着け！それと、母さん、俺とファイアはそんな関係じゃないから！」

レイドのその言葉でファイアの動きが止まった…

ファイア 「……………へ？」

レイド 「ん？どうしたファイア？」

レイドが聞くとファイアは不思議そうに口を開いた。

ファイア 「母さんって誰の事ですか…？」

レイド 「誰って今日の前にいる……………っでもしかしてシェリー説明してなかったのか？」

レイドはそう言ってシェリーの方を向いた。

シェリー 「クスクス、申し訳ありません魔王様、ファイアさんの驚いた反応が見たくてファイアさんには黙っていました」

シェリーは笑みを浮かべ面白そうにそう言った。

クラウド達の言葉にファイアの奇声が屋敷中に響き渡った。

レイド&クラウド&リリース

「（まあやっぱりこうなるよな……）」

ファイアが驚くのも無理も無いだろう、クラウドは二十歳前半ぐらいの歳にしか見えないし、アリスなどステイリアと同じか下手したらそれよりも幼いかもしいのだから。

ファイア 「アリスさん……その身体でどうやってレイドさんを産んだんですか？」

レイド&クラウド&リリース

「……ドテンツ……！！」（転けた音……）「……」

ファイアの想定外の言葉でレイドとクラウドは椅子から滑り落ち、リリースはその場で転んでしまった。

レイド 「ファイア……？そこなのか？お前が疑問に思う所は……？」

ファイア 「だって気になるじゃないですか？」

ファイアのその言葉にアリスは何処か遠くを見る様な目をして答えた。

アリス 「レイちゃんを産んだ時か、やっぱり大変だったよ、かなり苦しかったし死ぬかと思った、でも産まれたレイちゃんを見た時本当に産んで良かったって思ったのクラウドなんか良く頑張ったって言っただけ私の頭を優しく撫でて本当に嬉しそうにレイちゃんを抱いたんだよ」

レイド 「そつか……」

アリスの言葉を聞いたレイドは何処か照れ臭そうに頭を掻いた。

アリス 「所でレイちゃん 話しは変わるんだけど……」

アリスは突然に笑み（目だけは笑っていない）を浮かべてレイドの方を向いた。

アリス 「魔刀と魔眼を使ったでしょ？」

レイド 「ゾクツ！？」

アリスにそう言われた瞬間にレイドに悪寒が全身を駆け巡った。

レイド 「なっ何の事か……」

アリス 「レイドはお母さんに嘘はつかないよね」

レイド 「はい……、使いました」

レイドが小さくそう言うのとアリスは更に（目だけは笑っていない）笑みを深くしてレイドを見た。

ステイリア 「アっアリス様……、何か怖いよお」

リリス 「姉さん、私ちよつと庭にでも行つて来るよ……」

シェリー 「私もこれは流石に……」

そんなアリスを見て、シェリー達は回れ右をして扉に向かった。

レイド 「ちょー!?お前ら何処に行くきだ!?頼むから俺を置いて行かないでくれ!」

レイドの叫びは虚しくシェリー達は出ていき、扉は閉ざされた。

アリス 「レイちゃん?覚悟はいい?」

レイド 「かつ母さん?その魔力量は幾ら何でもか過ぎだと思っただけど…」

レイドがアリスの方を振り向くとアリスの手の平から黒い火球が形成されていた。

クラウド 「おいアリス、やるなら外でやれ」

アリス 「うん」

アリスはそう言って火球を消してレイドの首根っ子を掴みと窓から飛び下りた。

レイド 「待って!謝るから許してえええええ!ぎやああああ!?!」

ポオオオオオオオオオン!!!

レイドの叫びが聞こえた後に爆発音が辺りに響き渡り黒煙が舞った。

ファイア 「……………大丈夫なんですか?」

クラウド 「まあ一応あれでも手加減はしてるからな、多分きつと取り敢えずは大丈夫だと思うよ？」

ファイア 「……………」

クラウドの全く安心を感じさせない言葉にファイアはクラウドを横目で睨んだ。

ファイア 「所ですーっと気になっていたんですけど、魔刀とか魔眼って一体なんなんですか？」

しばらくクラウドを睨んでいたファイアは気が済んだのか聞いてみた。

クラウド 「なんだ、レイドから聞いて無かったのか？俺はもうてつきり知っている物だと思っていたよ」

ファイア 「聞いて良い物なのか悩んでいたんですけど、アリスさんのあの反応を見たらどうしても気になってしまっ……」

クラウド 「そうか…、良いよ教えてやる」

クラウドはそう言っつて椅子に着いたのでファイアも座る事にした。

クラウド 「まず魔刀って言うのは初代魔王が造り出した武器の事だ、魔刀Ⅱデグロニクル、古代魔界語で『全てを斬り裂く闇』って意味だ」

ファイア 「全てを斬り裂く……………」

クラウド 「そうだ、デグロニクルはその名の通り全てを斬る事ができる、人はもちろん、空間さえも」

クラウドのその言葉にファイアの脳裏のうりにレイドとの戦闘が横切った。

ファイア 「……………（あの、黒い刀が魔刀…）」

ファイアはクラウドの話しをただ静かに聞いていた。

クラウド 「ただな…、魔刀の切れ味を決めるのは、使い手の強い意思だ」

ファイア 「意思ですか？」

クラウド 「そうだ、デグロニクルは、何かを斬るって言う意思が強ければ強い程その切れ味を増す、逆に言えば意思が弱ければ何も斬れないただの棒切れ見たいな刀だ」

ファイア 「何て言うか…、とんでもない刀ですね…」

クラウド 「まあな…、これで魔刀の説明は一応終わりだけど何か聞きたい事はあるか？」

クラウドにそう聞かれてファイアは少し考えたが思いつかなかったの
で魔眼の説明をしてもらうことにした。

ファイア 「今のところはありません、魔眼の事について教えて下さいますか？」

クラウド 「解った」

ファイアにそう言われ、クラウドは魔眼について説明を始めた。

クラウド 「あまり詳しくは説明できないが魔眼の能力は見たいと思った物を見る事ができる」

ファイア 「どついう意味ですか？」

ファイアがよく解らないと言った顔をするとクラウドは説明を続けた。

クラウド 「そのままの意味だよ、魔眼はどんな物でも見たいと思つたら見る事ができるんだ」

ファイア 「どんな物でも…」

クラウド 「そう…、本人が見たいと思えば例え未来でも見る事ができる…、それが魔眼だ」

ファイア 「そんなことが…」

クラウドの言葉でファイアは瞳こころめ目した。

クラウド 「ただしこれにはそれなりの代償が必要だ」

ファイア 「代償…？」

クラウド 「そうだ…、魔眼は見たい物に比例して自分の寿命を縮めるんだ」

ファイア 「!？」

ガタツ！

クラウドのその言葉にフィアは瞳を見開いて椅子から勢いよく立ち上がった。

クラウド 「しかも魔眼を使わなくとも魔眼状態を維持しとくだけで寿命を削る」

フィア 「そんな…、それなら何故レイドさんは魔眼なんかを使おうとするんですか！」

バンツ！

フィアは激情に任せてテーブルを叩いた。

フィアには解らなかった

自分が何故レイドの事に此処まで感情を^{あら}顕わにするのかが、仮にも命を狙った相手なのに…

クラウド 「……………」

フィア 「っ！すいません…」

クラウド 「別にいいさ、それよりも落ち着いたか？」

フィア 「はい…」

フィアはそう言って再び椅子に座った。

フィアが椅子に座るとクラウドは口を開いた。

クラウド 「レイドは自分の命を軽く見る所がある、だからレイドが魔眼を使おうとしたら止めてくれないか？俺とアリスは訳あってレイドの側には入られないから」

クラウドはそう言って少し悲しそうな顔をした。

フィアはその理由を聞こうとしたが聞いても答えてはくれないだろうと察したので精一杯の笑みを浮かべて言った。

フィア 「解りました、もしレイドさんが魔眼を使いそうになったら私が止めます、だから安心して下さい」

クラウド 「ありがとう、それと魔刀も使わせなくてくれ、魔刀を造る際に俺達魔王の血が使われていて、魔刀を出すとそれに共鳴するかの様に魔眼も発動してしまうから」

フィア 「はい 魔刀も魔眼も使わせませんから安心していいですよ」

クラウドの言葉にフィアは笑みを絶やさずにそう答えた。
すると…

アリス 「ただいま」

ステイリア 「えへへ 楽しかった」 また一緒に遊びましょうね
アリス様」

アリス 「うん」

アリスとステイリアが扉から入ってきて、続けてシエリーとリリスに肩を貸してもらっているレイド達が入って来た。

シェリー 「大丈夫ですか？魔王様」

リリス 「いや、明かにこれは大丈夫じゃないから」

レイド （黒焦げ）

「……………」

ファイア 「レイドさん！？大丈夫ですか！？」

ファイアはレイドの姿を見た瞬間にレイドに駆け寄った。

クラウド 「お前何したんだ？」

アリス 「ふえ？、レイちゃんをお説教した後にステイリアちゃんと遊んでただけだけど？」

クラウドの問いにアリスは何でもなさ気に答えた。

クラウド 「どう見てもこれはやり過ぎだろ！？お説教とかそんなレベルじゃないだろ！？」

アリス 「クラウド程じゃないと思うけど？」

クラウド 「いやそうだけど……」

ファイア 「何の話しをしてるんですか？」

レイドに治癒魔法をかけたファイアがクラウド達にそう聞いた。

クラウド 「いや、何でもないよ、それよりもう遅いけどそろそろ帰る頃じゃないのか？」

クラウドの言葉に外を見て見ると日が沈み、星が少しだけ出て来ていた。

シェリー 「そうですね、そろそろ帰りましょうか、ステイリア？」

ステイリア 「はい、アリス様また遊びましょうね」

アリス 「うん、またね」

ステイリアとアリスはお互いに楽しそうに笑みを浮かべてそう言った。
すると…

レイド 「うっ…」

レイドが気が付いた。

ファイア 「あっ、気が付きましたかレイドさん」

ファイアはそう言ってレイドの方に歩み寄った。

レイド 「ああ…、よかった…、俺ちゃんと生きてた」

アリス 「もうレイちゃん！これに懲りたら魔刀と魔眼はもう使っちゃ駄目だからね！」

レイド 「はい…」

レイドがそう言つとレイドを睨んでいたアリスの顔が和らぎ「よし」と言つてレイドの頭を撫でた。

リリス 「じゃあそろそろ帰ろうか」

シェリー 「そうね、ではクラウド様、アリス様私達はこれで」

ステイリア 「バイバイ クラウド様にアリス様」

ファイア 「今日は話しが出来て楽しかったです またお話ししましょうね」

レイド 「親父、母さん、また来るよ」

クラウド 「ああ、身体に気をつけるよ」

アリス 「バイバイ」

レイド達はそう言つて扉から出て行きクラウド達は出ていくレイド達の背中を見送っていた。

クラウド 「行ったな」

アリス 「うん……」

レイド達が出ていくとクラウド達はそれまでの表情を消し難しい顔で喋り出した。

クラウド 「どうだった？」

アリス 「まだ、レイちゃんの奥底で、眠ってる、みたい…」

クラウド 「そうか…、レイドの、あれ、が目覚める前に早く、あれ、を消す方法を探さないとな」

アリス 「うん…、私の所為せいなんだよね…」

アリスはそう言って俯いてしまった。

クラウド 「違う！、誰の所為でもないって何回も言ってるだろ！」

クラウドがそう言うがアリスの瞳には涙が溜まっていた。

アリス 「私の所為だよ！私が入、それ以上言ったら本気で怒るぞ？」っ！」

アリスは反論するがクラウドの言葉によって止められてしまった。

クラウド 「余計な事は考えるなよ？それに…、お前に涙は似合わないよ」

アリス 「クラウド…」

クラウドはそう言ってアリスの瞳に溜まってる涙を指で拭い頭を撫でた。

アリス 「ありがとう…」

クラウド 「泣いた子供をあやすのは得意なんだよ」

アリス 「私子供じゃないよお！」

クラウド 「はいはい」

アリス 「うう〜」

アリスは頬を膨らませて唸って見せるがクラウドに頭を撫でられている内に徐々に気持ち良さそうに表情を歪めた。

アリス 「ふにゃ〜あ」

クラウド 「……………」（アリスは本当に可愛いな）

クラウドはアリスを撫でたまま視線を窓の外へと移した。

クラウド 「（必ず俺達が救ってやるからな、だから、呑まれる、なよ？レイド…）」

クラウドはまるで星にでも祈るかの様に心の中でそう呟いた。

日常編1 (後編) (後書き)

作者 「作者と」

ファイア 「ファイアの」

作者&ファイア

「いろいろ説明コーナー」

ファイア 「今回は私となんですな」

作者 「おう、それじゃあ説明始めるか ファイア、邪気について説明してくれ」

ファイア 「解りました え〜と邪気と言うのは、私達人間が作り出す負の感情の事です、魔力と言うのは人の心に影響されやすく、恨みや憎しみなどの感情を抱いて魔法を使うと負の感情も一緒に出て来てしまい、外に出てしまったその感情が邪気となります、魔界には黒い霧の様な物がありますがこれが邪気です、この邪気は私達生き物にも影響を与え、邪気を吸い込むと病気になったり、最悪の場合死ぬ事もあります、それだけでなく長い間邪気を浴びていると魔物に変わってしまい、それまでの記憶を失い、私達人間を含め他の生き物を襲う様にもなります、これでいいですか？」

作者 「おう、「ご苦労様」

ファイア 「次はクラウドさん達の説明ですよ？」

作者 「それは俺が説明するよ」

ファイア 「それではお願いします」

作者「おう」

クラウド

フルネームは

クラウド・ディア・グランディウス

7代目魔王でレイドの父にあたり、世界一と言っても過言ではない程の剣の腕前を持っている

身体的特徴は

髪、瞳と共に黒色で、腰まで伸びた髪を後ろで縛っている、顔はどちらかと言えば良い方で中の上といったところである

歳は…、ご想像にお任せで二十前半ぐらいの歳に見える

身長は179?

体重は64Kg

好きな事

昼寝・読書・アリスをからかう事など

嫌いな事

家族を傷付けられる事など

作者 「クラウドの説明はこんなものかな」

ファイア 「何て言うか流石はレイドさんのお父さんですね、好きな事や嫌いな事がほぼ一緒です」

作者 「次はアリスの説明だな」

アリス

フルネームは

アリス・ローゼンブルグ

7代目魔王の妃にして8代目魔王であるレイドの母
身体的特徴は

髪、瞳と共に黒色で、腰まで伸びる癖のない艶のある髪と可愛いと
言う言葉がぴったりな幼気な顔が特徴的

歳は…、ご想像にお任せで、ステイリアと同じかそれよりも低いく
らいの歳に見える

身長は138?

好きな事

クラウドに撫でられる事など

嫌いな事

子供扱いされる事など

作者 「アリスの説明もこのくらいだな」

ファイア 「本当に歳は幾つぐらいなんでしょうね…」

作者 「さあな、取り敢えずこれで今日説明する事は終わりだな」

ファイア 「じゃあいつものやりますか？」

作者 「ああそうだな…ってちょっと待って」

ファイア 「何ですか？」

作者 「読者の皆様にお願いがあるんだけど…」

ファイア 「まさかまた投稿が遅れるとか…」

作者 「違うよ！ただ俺が書いてるこの小説について何か思うところがあれば感想として書いてほしいなって言おうとしただけだ」

ファイア 「感想ですか？」

作者 「そつ、だって気になるからさあ、俺の小説が読者の方々にどう思われているのか」

ファイア 「それは凄く気になりますけど…、何か怖いですね、ただでさえ作者が、思い付き、で書いている駄文なのにそれについての感想なんて…」

作者 「うっ、否定できない、まあ強制はするつもりじゃないですし気が向いたら書いてみて下さい」

ファイア 「じゃあ終わりでいいですか？」

作者 「おう」

作者&ファイア

「「それでは皆さんまた次回まで」

ブツッ……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1994j/>

優しい魔王と光の姫君

2010年10月10日20時04分発行